

『孝子善之丞感得伝』研究—絵入勸化本における地獄の表象と版本上の展開—

遠藤美織*

目次

はじめに

- 一章 『孝感冥祥録』と『孝子善之丞感得伝』
 - 一 概要と書誌情報
 - 二 成立の背景
 - 二章 本文と挿絵の表象と特色
 - 一 本文と挿絵の内容
 - 二 挿絵の表象と特色
 - 三章 再版本の展開
 - 一 天明五年版
 - 二 永田調兵衛版
 - 三 明治二九年版
 - 四 明治三六年版
- おわりに

キーワード 日本美術史 日本宗教史 版本 挿絵 勸化本 浄土宗
捨世派 無能 『孝子善之丞感得伝』 絵解き 地獄 極楽
異界表現

はじめに

江戸東京博物館に『孝子善之丞感得伝』（資料番号〇二二五二五〇〇、〇二一五二五〇一。以下、『感得伝』と略称する）という版本がある。これは武蔵野文化協会が所蔵し、当館が寄託を受けている資料で、天明二年（一七八二）の初版発行以降、少なくとも四度は再版されたことが確認されており、当館にあるのはこのうち天明五年（一七八五）に再版されたものである。内容は実在の少年の地獄極楽巡りを主軸に、念仏の功德、浄土宗捨世派念仏聖である無能上人の称揚、孝子説話等、様々な要素が含まれたもので、勸化本としては豊富な挿絵を持っており、生き生きと描かれた様子は現代の我々が見ても十分に興味深い内容である。中世後半から近世は、二つの見地から、仏教における地獄極楽の表象が一段と庶民に広まった時代だと言われている。その一点目は社会構造の変化によるもので、それまでの権力者層が力を失うことで、寺院が庶民層への教化を意識し始めたことによる¹。地方の寺社への勧進や喧伝のため、「熊野勸心十界曼荼羅」や「立山曼荼羅」等の作品が多く制作されたことが最たる例である。

もう一点は、出版文化の隆盛による。江戸時代以降、商業出版が盛んになり、庶民にとって本が身近なものとなったのは広く知られるところである。出版物は、基本的に一点物で手元に置くことが難しい掛幅等と比べ、自由な時間に、自由な場面から読むことが出来るという長所があ

* 東京都江戸東京博物館学芸員

る。説話の普及は、勸化本の登場により、口伝と筆写による範囲から、説法の聴衆に加えて大衆の机上にまで広まったとも言われる⁶。中でも、当時何度も版を改められ、時代を経ても愛された、勸化本の中でもベストセラーと言える本は、人々に地獄極楽の様相をより印象的に残したと考えられる。

しかしながら研究史上では、近世以降の作品のうち、版本類への言及はあまり多くない⁷。これらは宗教的なものに限らず、他の美術品同様に現存数が非常に多いため、研究の余地があると思われる。

そこで本論では、前述の『感得伝』並びに、再版本を主要な資料として取り上げる。『感得伝』は、本文の元となった享保十九年（一七三五）刊の『孝感冥祥録』（以下、『冥祥録』と略称する）の時点で、高い知名度を誇ったと言われている。校訂に関わった説教僧と思しき伝阿は⁸、元文五年（一七四〇）刊の『女人愛執怪異録』の序において『冥祥録』の人氣ぶりを以下のように述べている。

京師獅子谷の僧、或時孝感の奇特を書たる草案と愛執の報応を記せる漢文とを携へ来て云、浄業のいとま訂正し玉へかしと。我つらく是を見るに古今の珍事なり。此故に日課のいとまに固陋をかえりみず書綴りて一本は孝感冥祥録と名て彼僧方へ遣しければ、京師の書林澤田氏乞請て版行しけるに都鄙の人、思ひの外にもてはやし、今に至ては壹万余部摺出せるとかや⁹。

実際に、『感得伝』は物語の舞台となった奥州や初版本の版元があった京都に留まらず、全国各地に流布した形跡がある。例えば、明治時代まで城崎温泉で貸本屋を営んでいた中屋甚左衛門の貸本リストには、初版本の『感得伝』が名を連ねている¹⁰。

また、『感得伝』の影響を受けて制作された関連資料も多い。筆者が

確認出来ている限りでは、肉筆画が九点、仏像が一点、刷物が二点、再版本が四種の計十六件が見られる⁷。これほどの作例があり、また全国的な広まりが確認されている『感得伝』を研究することは、近世から近代にかけての地獄観の一端を明らかにすることに繋がるだろう。

先行研究では、本文の成立の背景やその特徴に関しては横山邦治氏、後小路薫氏、堤邦彦氏、長谷川匡俊氏、内村和至氏が¹¹、地方寺院に所蔵される肉筆画については、渡浩一氏、織田顕行氏、小林一郎氏や小林玲子氏らが論じているが¹²、その全ての網羅的研究には余地があるほか、『冥祥録』との比較や、『感得伝』の地獄を描いた挿絵の論考、再版本の展開についての研究は進んでいない。

そこで本論では、近世から近代にかけて一定の知名度と影響力があった『感得伝』並びにその再版本の特徴を整理する。これにより、今後同作品の全国的な展開を探るための体系的論考の足掛かりとし、近世の地獄絵研究に僅かなりとも貢献したい。

一章 『孝感冥祥録』と『孝子善之丞感得伝』

一 概要と書誌情報

『感得伝』は上下二冊の絵入勸化本である。版心には「感得伝」とあり、現存する資料の中には題箋が欠けているものもあるが、題箋を持つものは「¹³孝子善之丞感得伝」や¹⁴、「¹⁵奥州善之丞感得伝」と記す例が多い¹¹。初めに、『感得伝』の概要を触れておく。

奥州伊達郡南半田村田町に、松野善之丞という少年がいた。善之丞は吃音症だが正直で孝行者である一方、父親の善四郎は仏教を誹謗した罰で、ハンセン病を患い床に伏していた。享保元年（一七一六）、十五歳

となった善之丞は、父の病氣平癒を祈り、鎮守八幡宮へ毎晩参詣する。そこで八幡大菩薩の天啓を受け、これに加えて桑折の薬師如来、万勝寺

村の観世音の三ヶ所に毎晩参詣した。数々の靈験の後、同年二月十二日、「汝に父が病由を見すべし」と言う地蔵菩薩に導かれ、地獄極楽の有様を見て回る。地獄には魂のみ先立って呵責を受ける父も含め、数多の亡者がいた。また、極楽の莊嚴で有難い様も見た。その後現世に戻った善之丞は、家族と共に無能上人に帰依する。実は、無能上人は地蔵菩薩の化身であった。一刻も早くの往生を願う善之丞は、家族の反対を押し切り出家して直往と名乗った。

この経験を出家した善之丞（直往）が語り、無能の弟子である厭求が記し、林丹治の挿絵を加え、麗澤堂澤田吉左衛門が版元となって刊行されたのが『感得伝』である。

善之丞が深く帰依した無能上人は、浄土宗捨世派念仏聖として名高く、主に東北地方での民衆教化活動で大きな足跡を残した高僧である。筆記者となった厭求は、無能の門弟の中でも重要な活躍をした僧で、長谷川匡俊氏によると、厭求は病床についた師の看病をして、同じく高弟の蓮心と共にその臨終を看取ったほか、宝洲が『無能和尚行業記』（以下、『行業記』と略称する）を刊行する際も、無能の身近な高弟として草稿の作成に助力したほか、自身も『無能和尚行業記遺事』を編集する際、『行業記』から漏れている無能の平生の振る舞いや教誡等を聞き集めて纏めた¹²。

版元となった麗澤堂澤田吉左衛門は、京洛東知恩院古門前石橋町（現京都府京都市東山区石橋町周辺）に店を構えていた。版元の出版物の傾向としては、『感得伝』巻末の版元蔵版標目録からは浄土教関連の出版物が非常に多いこと¹³、初版本『感得伝』の他に、善之丞が深い崇敬の念を抱いていた無能上人を中心とした関係者らの出版物を多く取り扱っていることが見て取れる¹⁴。【図1】伝阿も版元について「京師の書林澤田氏乞請て版行しける」¹⁵と述べていることから、版元の澤田吉左衛門は彼自身も浄土宗の信徒で、無能上人周辺で起きた靈験譚に関心を寄

せていた可能性もある。

また、絵師・林丹治についてであるが、日本古典籍総合目録データベース等で同時代麗澤堂を版元とした版本を確認したところ、同名の絵師の落款があるものは確認出来なかった。挿絵の最後には絵師名の下に豊信の印があるが、石川豊信が使用していた印とは字体が異なる。また、豊信は江戸で活躍していたのに対し、『感得伝』は京都の版元から出版されていたこと、豊信自身が得意とする絵の傾向が美人画やあぶな絵等の女性を主体とした絵であり、『感得伝』の内容とは隔たりがあること、加えて豊信自身の作画が凡そ安永期で留まることから、林丹治が豊信であるかは疑問が残る。

なお、初版本は目録を除き上巻五二丁、下巻四一丁のうち、挿絵はそれぞれ上巻に二五丁分、下巻に十丁分ある。上下巻を通じて現世の様子を描いた挿絵は十六丁分、地獄の挿絵は十四・五丁分、極楽の挿絵は四・五丁分あり、文量の多さに比例して現世と地獄の挿絵が多いという特徴が見られる。

『冥祥録』と『感得伝』の本文自体に殆ど変化はないが、構成には幾つか違いがある。【表1】で両書を比較した。『冥祥録』の評注は高度で専門的な仏教知識に裏付けされたものであるが、担当した宝洲は、洛東

【図1】『孝子善之丞感得伝』下巻（天明2年〈1782〉刊、早稲田大学図書館蔵）目録（部分）

【表1】『冥祥録』『感得伝』構成表

題名	『冥祥録』	『感得伝』
前付	挿絵と七言律詩	
	挿絵と和歌	
	孝感冥祥録題辭 (宝州)	
	孝感冥祥録凡例	
本文	本文	本文
	評注 (宝洲)	挿絵 (林丹治)
後付	閔孝感冥祥録偈 (定龍、実観)	閔孝感冥祥録偈 (定龍、実観)
	校訂の経緯 (伝阿)	伊呂波和讃 (無能)
	孝感冥祥録喜捨助刻名位	和讃 (不能)
		刊行の経緯 (称阿)
		華頂山御蔵版目録
		皇都書林麗澤堂蔵版標目録

獅子谷法然院を中興した学僧で、生前の無能とも交流があり、無能の死後は『行業記』等の伝記を編集している¹⁶。『冥祥録』は一万部以上摺り出されたベストセラーと言える本であるが、想定される読者としては、浄土宗系の僧侶や、仏教に関心がある知識層向けだったのだろう。

一方、『感得伝』は『冥祥録』から物語本文と偈を抜き出し、本文内の振り仮名を増やして、挿絵を多く盛り込んだものとなっている。なお、称阿は跋文において、『感得伝』を刊行した理由を

しかるに今此『感得伝』は、辞がきの所々に其ありさまを絵がけるふ

みを、あやしのほごの中より求いだしたりしを、かくしても捨おかば蠹魚てふ虫のすみかともなりなんもいと口おし。またおろかなるわらわべ女などの、つの文字ふたつものあかちもしらざらんもの、此有様を見て釈土をいと乞、じょうどを願ふのたつきともならめやは。¹⁷

と述べており、『冥祥録』から『感得伝』へ再編集する理由の一つとして、婦女子向けに親しみやすくしようとしていたことが分かる。

二 成立の背景

婦女子向けに改められた『感得伝』だが、そもその成立の背景には何があるのか。本文は現世と地獄に関する描写が多いが、物語を構成する要素としては、他に念仏の功德や無能上人の称揚、孝子説話等様々な要素が絡み合っている。また先行研究でも既に『感得伝』の成立についてや¹⁸、善之丞の周辺環境や人物の特徴についても論じられているが¹⁹、これらを『感得伝』の特徴から整理しなおし、善之丞周辺の人物や環境がどのように作用したのかを検証することは、まだ余地があるように思われる。

先行研究で指摘されるように、『感得伝』は勸化の意図が前面におし出されており、それは文中に見られる数々の仏教的色彩の強い奇異性に示されている²⁰。そこで、この節では宗教的な事由に加えて文化的側面を持つ構成要素に焦点を当て、これを手掛かりに先行研究を整理しつつ成立の背景を考える。

(一) 宗教的背景

慶長十七年(一六一二)のキリスト教禁止令以降、寺請制度(檀家制度)が実施されたことで、庶民の間で仏教が広く深く浸透し、庶民仏教の時代が到来した。国内には数多くの宗派があるが、善之丞の生まれ育つ

た奥羽二州は、元来浄土宗寺院の数はあまり多くない。長谷川氏によると、現代でも福島県に残る一五〇寺の寺院を宗派別に比較すると、最も多いのが曹洞宗で四六八寺、浄土宗は一六一寺であり、僅か十一パーセントに過ぎず、来世主義的というより現世主義的な信仰風土を持つ地域であると指摘している²¹。

このような環境下で育った善之丞が来世主義的性格を持つ物語の主人公となったのは、浄土宗捨世派念仏聖無能上人と、その念仏集団の存在に起因している。無能は天和三年（一六八三）磐城国に生まれ、十七歳の時伊達郡桑折町大安寺で出家すると、その後江戸の増上寺等でも修学したが、最終的には専修念仏に帰結し、日課十万遍以上を為した²²。また、無能のもとには信者の霊験譚が多数寄せられており、その一端は『近代奥羽念仏験記』（以下、『験記』と省略する）や『行業記』に詳しい。無能は、特に晩年の五年間において熱心な布教活動をしたが、長谷川氏の先行研究によると、中でも善之丞の住む伊達郡周辺には

- ・ 正徳三年（一七一三）九月の伊達郡北半田
- ・ 同五年（一七一五）十一月三日から十四日の伊達郡桑折大安寺
- ・ 同六年（一七一六）二月から六月にかけての伊達郡藤田大千寺、保原浄運寺、梁川称名寺
- ・ 改元後の享保元年（一七二六）八月の川俣東円寺

等で巡教のため訪れている²³。

また、『感得伝』は善之丞が経験した信仰体験を記録したという実話実録性を持つが、それと関係すると思しき善之丞の父・善四郎の口上書が、享保元年十月十九日付で無能上人著述の『験記』に収録されている²⁴。なお、享保元年は『感得伝』において善之丞は数えで十五歳になり、この年の二月十二日に地獄極楽巡りをしたことになっている。つまり、この頃から『冥祥録』刊行の享保八年（一七二三）までの間に、善之丞の話はブラッシュアップされ、我々が知る内容の信仰体験が形成された

と考えられる。

長谷川氏は『感得伝』の内容について、当初から長編小説の体裁を成しておらず、恐らくはもっと簡潔な話であったであろうと指摘している²⁵。また、後小路氏も善之丞の信仰体験も念仏集団の中で共有され成長したこと²⁶、内村氏はより具体的に『冥祥録』凡例において

又録中に。菩薩如意を持たまふなどいへる事有。善之丞もとより一文不知の童子なれば。如意といふ物かつてしらず。只何やらん御手に持給ふといふを。傍人其形を一一推したづねて。如意なりといふことを知りぬ。かやうの事甚多し。此一を以て余を准知すべし²⁷

と記されているのを引用し、この「一一推したづね」る過程で善意による無意識の誘導尋問が起こったことは疑いないとしている²⁸。

加えて、堤氏は勸化本の流れとして、享保末期頃から短編説話編纂による編述形式ではなく、長編化志向が確認されるようになることを指摘した²⁹。『冥祥録』の刊行も享保期のことであり、堤氏が指摘する勸化本の流れと時期が同じである。善之丞の話が意識的にしろ無意識的にしろ、念仏集団の中で共有されているうちに長編化し、『冥祥録』並びに『感得伝』刊行への流れとなったと考えられる。

この念仏集団と無能上人の宗教意識であるが、具体的にどのようなものか分類すると、下記の四点が挙げられる。なお、ここでは先行研究の成果を元に、『感得伝』でも見える宗教意識を筆者が分類した。

① 神仏による霊験

無能は熱心な捨世派の僧侶であったが、他宗教にも寛容な人物でもあった。長谷川氏は無能の民間信仰に対する態度について、招かれた地の鎮守社に必ず参詣し、説法に支障なく聴衆がよく信心を起こすように

加護を祈ったこと、そのためか説法の座で聴衆が鎮守の来現を感じ帰依することが多かったことを指摘している³⁰。

『感得伝』でも善之丞の与った神仏による靈験は多く、鎮守八幡宮の八幡大菩薩は「汝父が為に我に祈る志浅からず。(中略)是より南にあたりて桑折の薬師如来、又万勝寺村の観世音へ毎夜詣で、丹誠を抽で祈なば、必ず感応あるべきぞ」³¹と述べ、善之丞が三社詣りをするよう勧められている。他、三社詣りの道中出会った山神は「汝父が重病をかなしむ、毎夜三所へ詣る事たぐひなき孝心なり。弥々信心怠らずば所願成就すべし」³²と励ましている。加えて、内村氏は同じく道中出会った僧形八幡神が連れる「こんでい駒」は、『冥祥録』評注にある通り『仏説太子瑞応本起経』における「捷陟」、即ち釈迦の白馬になぞらえられていることを指摘している³³。

このように、『感得伝』では念仏勸化を加護する神としての神道信仰が強く出ているが、これは当時の神仏習合思想だけでなく、前述の無能の宗教意識からの影響が大きいだろう。

② 仏罰による病・障がいと念仏によるこれらの治病

悪因悪果という言葉があるように、仏教においてハンディキャップを背負うことは、因果によるものという考えが存在した。この考えは『冥祥録』と『感得伝』にも見られ、善四郎の病も善之丞の障がいの要因もそのように描かれている。一方で善因善果ともいうように、地獄極楽巡りの体験や日課念仏の実践、出家の後は治癒している。無能の周囲ではこのような治病の現益報告が非常に多く、『験記』には前述のように善之丞の父親の報告例「善四郎口上書」がある。

浄土宗において治病等の現益は、本来の目的たる正念往生に付随する利益と考えられていたが、民衆はどう捉えていたのか。長谷川氏は次のように述べている。

生き仏としての無能による日課授与は、本人の意図とは無関係に、多くの場合その病を治癒させる宗教的処方として受け止められ、(中略)現益にあずかることが契機となつて、信者の念仏の信仰と修行は一層増進せしめられていった³⁴

治病を期待しての信仰は『験記』にも見え、「善四郎口上書」ではハンセン病に対する数々の治療をしても効果がなかったところで、無能から日課を拝受したことが記されている。また、『感得伝』では信心を起こして日課を行ったことでハンセン病が治った善四郎を、無能は法座にて「念仏の力にて、悪病かくのごとく、快然したりとて、其姿を見せて示し」³⁵、聴衆と話を共有した。これを見た聴衆は、自らも治病の現益を与りたいと願い、また快方に向かったのは無能の日課授与によるものと考えたのだろう。

江戸時代は、檀家制度等により仏教が世俗化した時代だった。堤氏は、そのようななかで説法僧が、庶民のほとけともいべき観音や地蔵等の靈験を語り、現益志向の庶民らの信仰心に訴えたことを指摘した³⁶。善之丞の周辺環境は、現益志向が強い風土であったため、無能周辺で起きた現益の報告は、地蔵菩薩と同一視された無能に対し、民衆が期待した信仰による利益と結びついたものと言える。また、書籍として発行するにあたり、仏罰による病・障がいと念仏による治病は、読者の信心を励起するために重要な構成である。善之丞の身近な出来事であり、信者の間で共有された現益の一つとして、善四郎の治病報告が『感得伝』に組み込まれたのは当然の流れと言えよう。

③ 地蔵菩薩の示現たる無能上人の称揚

無能の周辺で起きた現益には、数々の瑞相感見もあった。長谷川氏の先行研究によると、無能が金色の仏身に変じた例のほか、法座で無能の

顔を見上げたところ姿はいつともなく消え、その後、地蔵菩薩が顕現し、また無能の姿に戻ったという例等がある³⁷。『感得伝』でも善之丞が受けた霊夢で、無能が自身のことを地蔵菩薩であると述べる場面があり、無能の本地が地蔵菩薩であることは彼を信奉する信者の共通認識であったと言える。

『善四郎口上書』にも記載の通り、無能は霊験に与った信者から報告を受けると日課念仏を増し、また法座では信者を聴衆の前に示して説法することがあった。これにより、信者らは自らも瑞相感見に与りたいと願い、また実際に経験した信者を話題にして話し合うことは多かつただろう。霊験譚の熱望と共有によって、無能への帰依と信仰は更に強いものになり、善之丞の地獄極楽巡り譚の成立、普及に繋がったのだと考えられる。

④ 冥界観

『冥祥録』と『感得伝』の冥界観にも、無能並びにその周辺の宗教意識が反映されている箇所がある。後小路氏は「善之丞は極楽の地面が「一足ふみしかば、柔にしてくぼみ入る事四寸ばかり」と四寸くぼんだとして、無能も臨終近く極楽を感じて「地は悉く金色にて軟かなり、履む時は窪み入ること四寸なり」と厭求に告げている」ことから、「この話の成長は善之丞の中でなされたというより、むしろ厭求を中心とした無能の念仏集団の中でなされたと考える方が、より実際に即しているであろう³⁸」と指摘した。

「極楽の地面を踏むと四寸ほど窪んだ」ということを述べているのは、無能や善之丞だけではない。他にも、『行業記』に収録された信夫郡沢又村の斎藤利八という信者の極楽感見譚に見られ³⁹、無能と信者の間で共通した極楽の認識があったことが伺える。『行業記』の善之丞を紹介する項目では、「此善之丞といへるは。先立て地蔵菩薩かたじけなくも。

ミづから道指南し給ひて。親に地獄・極楽のありさまを見せしめ給ひ。種々の現益に預りし者なり⁴⁰と記してあり、彼の経験は集団の中で現益、功德と捉えられていたことが理解される。念仏集団で共有されたために無能の極楽感見譚と記述が摺り合わされ、周辺の宗教意識が反映され、現在の形になったと理解しても良いだろう。

無論、成立背景はこれに留まらず、広義には出版文化の隆盛による説教台本や勸化本の流通、絵解きの普及等が複合している。これらは全国的に共通して見られる気運であり、一つの時流、文化ともとれるため、考察は次で述べる。

(二) 文化的背景

① 絵解きの流行

渡邊昭五氏は、古代から中世の信仰と関心の変化について、「自力による持律持戒の善人正機仏教が中世期に入っての悪人正機への転換において、易行による往生に性格を変え(中略)、持戒による上への極楽への願望よりも、無為怠惰においての下へ落ちる地獄への恐怖の方が、もっぱらの関心の中心になってきた⁴¹」と述べている。この流れを汲み、中世以降は地獄極楽を視覚的に表現した作品が増えた。

例えば、中世末期以降熊野比丘尼らは橋や招かれた屋内等で「熊野観心十界曼荼羅」の絵解きを行うことがあった。画中には目連救母説話や老いの坂図のほか、賽の河原や血の池地獄等、従来の地獄絵にはない偽経等を元にした新たな図様が描かれた。小栗栖健治氏はこれらを「人の生き様と家の継承に結びつく題材」とし、同曼荼羅を「十六世紀後期以降に成立する他の地獄絵にも散見されるが、それらを総合的に取り入れ」た「家」社会の地獄絵⁴²としている。「熊野観心十界曼荼羅」は当時の社会構造、思想等に合致したものであったのである。これらの図様は近世大いに広まり、地獄の呵責を描いた典型的な場面として認識されるよ

うになった。なお、『冥祥録』と『感得伝』にも、賽の河原や血の池地獄に関する記述がある。『冥祥録』評注では、当時一般的に知られているとは言え、経典に依らない地獄の情景であるとの断りが記されており⁴³、絵解き文化の影響力が感じられる。

② 出版文化の隆盛

江戸時代になると、それまで限られた階層にのみ供された書籍が、庶民も気軽に親しめるものへと変化した。勸化本に焦点をあてると、江戸期の勸化本研究の大家である後小路氏の纏めた「増訂近世勸化本刊行略年表」では、やはり寛永年間前後から徐々に刊行され始め、寛文年間から盛んに刷られるようになる⁴⁴。また、勸化本でなくとも、日本人の地獄極楽観に多大な影響を与えた源信の『往生要集』のような仏書や、有名な地獄極楽巡り譚の一つ『富士の人穴草子』、曾我休目の『為愚痴物語』、浅井了意の『御伽婢子』等の挿絵付き仮名草子等が近世初期に刊行されている。

本論において、仏書・草子類を一括りに論じる意図はないが、近世において信仰と生活は密接な関わりを持っていた。後小路氏は『近世往生伝』の草子を読んで信心を得た西陣の機織りの女を例にとり、唱導教化によって仏道を志し信仰する者が多かったことを指摘している⁴⁵。上記の仮名草子の多くは、生活の延長線上にある信仰体験が多く選ばれ収録されており、読者層にとり身近な設定の登場人物の説話は、それだけ影響力のあるものだったのだろう。また、上記に挙げた草子類の作者が、僧侶やそれに類する立場と思しき人物であったことも、両者を完全に分別するのを難しくしている。

加えて、書籍という形態に限らずとも、人々の冥界観の定着に影響を与えた出版物がある。中でも「浄土双六」はその最たる例と言える。岩城紀子氏は、万治年間から寛文年間の俳諧書に「浄土双六」に関する句が見られ⁴⁶、この頃には「浄土双六」が遊郭や日待・月待行事等の庶

民が集う席で使用されたことで普及したと指摘している⁴⁷。また、遊びと教育の両方の要素を持つ双六は各家庭においても親しまれ、近世から近代を通して地獄極楽、善悪等教訓的意味合いを持つ様々なテーマで出版された。

何れにせよ、先行研究でも指摘されているように、このような出版物を媒介とした近世民間仏教の浸透は、仏教怪異小説・初期読本（勸化もの）の盛行をもたらしとともに、極楽の情景や地獄での厳しい呵責、地藏菩薩による救済等、人々の冥界観をより明確にした⁴⁸。

③ 孝子説話の流行

江戸時代は孝子説話が非常に持て囃された時代であった。特に、中国で生まれた「二十四孝」は、近世に入り出版技術が確立すると、文題・画題に積極的に取り入れられ、諸版が刊行された。なお、徳田進氏は『孝子説話集の研究近世篇—二十四孝を中心に—』の第二章「孝子伝の盛況」において、『冥祥録』の紹介をしている⁴⁹。研究史の上でも善之丞の物語は孝子説話の性格を持つていと捉えられていることが看取される。

本来、「孝」という思想は儒教の考えに基づくものであるが、近世に刊行された孝子伝の中で、当代の国内における事物を初めて取り上げたのは、僧侶による著作であった。従来この「孝」の受容から本朝物の展開は、(一)『二十四孝』等によって中国古典を受容し↓(二)浅井了意『大倭二十四孝』（寛文五年（一六六五））他で日本古典への注目が起こり↓(三)藤井懶斎『本朝孝子伝』（天和四年／貞享元年（一六八四））『今世』部で日本の当代への視点転換が起きたとされていた。しかし近年の研究で勝又基氏は、(一)『二十四孝』等によって中国古典を受容し↓(二)元政『釈氏二十四孝』（明暦元年（一六五五））で日本古典への注目が起こり↓(三)高泉『釈門孝伝』（寛文六年（一六六六））初印本で中国当代への注目がされたこと↓(四)『釈門孝伝』修訂本で日本

の当代への視点転換が起きたと指摘した⁵⁰。主に、儒仏論争での護法が理由とされるが、勝又氏は『釈門孝伝』刊行後の、当代の日本にも孝僧はいるという反響も要因であるとしている⁵¹。一般的に、江戸時代は仏教よりも儒教の方が優勢であったとされているが、仏教側はただ旧勢力として座しているのではなく、寧ろ積極的に「孝の重視」という儒教思想も取り入れたというのである。

そのような中で『感得伝』が仏教側から刊行されたのは、自然なことと言えよう。『感得伝』は、その題の頭に「孝子」と銘打ってあるように、作中で善之丞が起こした行動の起因は孝心によるものであり、その際直面した困難に対する解決策として、宗教的な方法を実践したと言える。最終的に善之丞は父母の反対を説得し、また父母も善之丞を出家させるよう霊夢を見たことで許され、剃髪出家するが、ここに儒教よりも仏教を優先する仏教側らしき思想が見える。

なお、『感得伝』にはその関連作品の一形態として、「本朝廿四孝」の「信濃国善之丞」、「皇国二十四功」の「信濃国の孝子善之丞」という錦絵がある。共に「二十四孝」を画題とし、国内でも孝行・忠義を尽くしたことで有名な人物を選んだ作品である。善之丞の体験が単なる霊験譚・功德譚ではなく、地獄極楽巡り、孝子説話と複合的要素を併せ持っているからこそ、『冥祥録』が仏教側や孝を持って囃す庶民にも人気を博し、続く『感得伝』や関連する錦絵が制作された要因の一つになったと考えられる。

第二章 本文と挿絵の表象と特色

一 本文と挿絵の内容

概要と成立の背景について触れたところで、次いで『冥祥録』と『感得伝』の各々の特徴について見ていきたい。『感得伝』の本文は先行作品の『冥祥録』をほぼ踏襲しているため、その相違点は主に構成や挿絵

に散見される。そこでここでは、はじめに『冥祥録』と『感得伝』を構成する内容を比較することで変化点を整理し、その後『感得伝』そのものの特徴として、本文と挿絵の対応関係、挿絵の表象自体の特徴等を検討する。なお、両書の構成については、前掲した【表1】の通りである。

(一) 『孝感冥祥録』

① 本文

『冥祥録』から『感得伝』へ改められるにあたって、物語本文に大きな変更点はない。多くは語句を平仮名と漢字の何れかに改めるか、接続詞等の文中の一語が増減する程度である。他に、編集の際段落が前後している箇所もあるが、物語の構成上さほど影響はない。両書の本文を比較してみたところ、該当するのは管見の限り二か所のみであった。一か所目としては、『冥祥録』下巻の地獄極楽巡りから帰還した後の場面で

・「地獄極楽感見の後ハ。片時も早く剃髮支度念願にて候へども(後略)⁵²
 ・「極楽拝見の後思ふやう。あれ程結構なる極楽へまいらず。かかる浅間しき娑婆に逗留せん事無益なり。(後略)⁵³

という二つの段落が入れ替わっていた程度で、二か所目も同じく地獄極楽巡り帰還後に冥界での出来事を思い出す場面である

・「或所にて。当麻曼茶羅を拝ませ候へバ。手をうつて申候ハ。(後略)⁵⁴
 ・「又或夕ぐれに。庵室にておもてを詠め居て。頻に落涙せしゆへ。(後略)⁵⁵

という段落が前後しているのみであった。何れも隣り合った段落の順序が入れ替わっている程度の違いである。

また、本文そのものが脱落することは少なく、『冥祥録』下巻の極楽巡りの中にある以下の段落が『感得伝』で抜け落ちているのみであった。

・「又上品の菩薩達。をのをの白蓮の上に乗居給ひて数百体づつ一所に集り余念なく御物語し給ふあり。其声の出るに随て。光明御口

より出。ちらちらと虚空に舞ひ上りぬ」⁵⁶
 どちらも物語上重要な変更点とは考えにくいいため、偶発的なものであると推測する。

② 挿絵

『感得伝』は『冥祥録』に挿絵を多く加えたものだが、元々『冥祥録』において挿絵は少なく、巻頭の口絵一丁分のみとなっている。挿絵は半丁ずつ異なる場面を描いており、それぞれ

- ・ 善之丞が地蔵と共に地獄極楽巡りへ旅立つ場面【図2】
 - ・ 善之丞が父善四郎の病氣平癒のため参詣していた道中、僧形八幡神に助けられ薬師堂から観音堂へと向かう場面【図3】
- を描いている。つまり、作中の主要な場面と目される地獄極楽の場面ではなく、現世或いは現世とあの世の境で神仏から利益を受ける場面を挿絵として描いているということになる。

次に『冥祥録』のそれぞれの挿絵に着目する。【図2】では、善之丞が地蔵と共に地獄極楽巡りへ旅立つ場面が描かれている。地蔵菩薩は左手に宝珠、右手に六道を遍歴遊行するための錫杖を持ち、蓮華座に立ち善之丞を見下ろしている。善之丞は右手で地蔵菩薩の錫杖を握り、左手は与願印のような印相を示す。物語内ではまさに地獄極楽巡りへ出発するという場面だが、挿絵ではこれから何が起きるか知っているかのような落ち着いた様子の善之丞が描かれている。信心深い善之丞自身の聖性を感じさせると共に、物語全体の象徴的な場面を示している。

次いで、【図3】を検討する。この場面を物語本文では、以下のよう

に記述している。

其齢六十あまりの高僧。黒き衣をめし。白き裸背馬を曳来り。善之丞か身の雪打払ひて。彼馬に乗せ給ふ。(中略) 則飛がごとく中を走り。

【図2】『孝感冥祥録』(享保19年〈1735〉刊、横山邦治氏蔵)「新日本古典籍総合データベース」より、半丁部分のみ

【図3】『孝感冥祥録』(享保19年〈1735〉刊、横山邦治氏蔵)「新日本古典籍総合データベース」より、半丁部分のみ

しばしが間に薬師堂に着ぬ。(中略) 薬師堂より。菩薩のかたちなるが十二人。幢天蓋などさしかざしたまひて。馬の前後をとりかこみて送り給ひしが。其内一人の菩薩仰られしハ。念仏して極楽に往生する人をバ。我我十二人にてかくの如く送るぞと宣ひける⁵⁷。

しかし挿絵を確認すると、幾つか本文と異なる描写が確認出来る。例えば本文では「裸背馬」、つまり鞍を置いていない馬であることが明記されているが、挿絵では馬に杳葉の付いた胸繫や腹帯がかけられており、善之丞も鞍の前輪部分を握っている。また、本文では薬師堂から十二尊の菩薩が随行したと記されているが、挿絵に描かれる随行者らは何れも

甲冑に身を包み、沓を履き、鉾等の武器を所持している。菩薩の装束は古代インドの王族を模したものであり、髪を結び上げ、地肌を衣を纏い、宝冠や胸飾等の装身具で飾り立てた華やかな姿が一般的である。これを考慮すると、挿絵で描かれているのは菩薩というよりも天に類似していると言える。また、こちらの挿絵は前者の挿絵よりも本文中では前の場面である。

これらの違いから、『冥祥録』の挿絵を描いた絵師は、本文のあらすじは知っていたようだが、確認不足な点があり、仏教に関する知識もまた不十分であるため、画僧のような専門的知識がある者ではなく、一般的な絵師に依頼したと推測される。

(二) 『孝子善之丞感得伝』

①挿絵の分類とその差の背景

『感得伝』本文と挿絵の対応関係は、『表2』『感得伝』本文挿絵対応表』に纏めた通りである。挿絵を分類すると、全四三場面三五丁あるうち、現世は全二四場面十六丁、地獄は全十六場面十四・五丁、極楽は全五場面四・五丁に分けることが出来る。

この分類からも明らかのように、『感得伝』内で最も挿絵の割合を多く占めるのは現世に関する場面である。これは、善之丞が十三歳の頃から往生した三六歳まで（『冥祥録』は刊行年が没年よりも前のため、口述した享保八年の二三歳まで）の出来事を記した、彼の一代記としての側面を持つ本文の文量に比例している。

次いで多いのが、種々の地獄を描いた場面である。『感得伝』は、本論以外でも地獄極楽巡り譚の研究資料として設定されているように、複数の構成要素の中でも特にこの点に着目されることが多い。その要因として、実在の少年の地獄極楽巡り譚という、近世に成立した仏教説話としては稀有な構成であること、また、庶民の冥界観が浸透展開した同時

代作品として、読者の興味をそそる場面が多いということが挙げられる。

『感得伝』の挿絵を見ていると、『冥祥録』では現世における霊験譚のみが挿絵化されていたのに対し、何故『感得伝』では地獄に関する挿絵が多いのかという疑問が生じるが、これは『感得伝』刊行当時の出版業界の流行が関わっていると思われる。出版業界では、鳥山石燕によって描かれた『画図百鬼夜行』が安永五年（一七七六）に、同八年（一七七九）には『今昔画図続百鬼』が続いて出版されて人気を博す等、当時は人外・異界表現に注目が集まっていた。地獄絵全体の流れとしても、江戸時代中期、特に十八世紀後半は、地獄絵が地方に急速に普及したことが知られている⁵⁸。澤田吉左衛門も版元の立場としては、一万部以上刊行されたという『冥祥録』を改め新たに摺り出すとなれば、更に売れるよう工夫を凝らすのは当然のことである。元々『感得伝』は婦女子向けに、読者が親しみやすく感じることを意図していたこともあり、これらの背景が合わさって地獄部分の挿絵も多く加えられたのだろう。

他に、『感得伝』にあつて『冥祥録』にはない挿絵としては、極楽部分に関する場面がある。詳細は後述するが、『感得伝』の極楽部分の挿絵は「当麻曼荼羅」の影響を大きく受けており、図様の流行が見られる。「当麻曼荼羅」が近世を通して大きな知名度があったことは広く認知されている通りである。江戸時代には注釈書が何度か刊行されており、天和二年（一六八二）に挿絵付きのものとしては光寛の『当麻曼陀羅科節』が刊行された。これを皮切りに、『感得伝』刊行以前だと、明和九年（一七七二）に大順によって『当麻曼荼羅搜玄疏』が著され、後の安永三年（一七七四）に挿絵付きの『当麻曼荼羅搜玄疏図本』（以下、『搜玄疏図本』と略称）が出された。これにより「当麻曼荼羅」の図様が普及し、図解によってその意味がより理解されることとなった。特に大順による両書は、『感得伝』刊行年とも近く、「当麻曼荼羅」の図様が版本でも普及したことは関係があると推察される。

【表2】『感得伝』本文挿絵対応表

挿絵番号	丁数	コマ記号	本文	備考
①	1		善之丞幼少なりといへども、只今父が討れんとするを見て、取掛り止めんとして、善之丞三ヶ所まで手を負しか共、猶もひるまず、刀をもぎとらんと取付居たる所に、善之丞母外よりかけつけ、二人して漸刀をうばひとり静めける。	
②	1	a	爰に或医者云、「癩病には薬種に白蛇といふものあり。調べ来りなば、父の病癒治すべし」と。	
		b	善之丞悦、則仙台白石の町に至り〔此道五里あり〕	
		c	薬店にて白蛇の事をいふに、本より甚しきどもりなれば、人々一向聞わかず、そこらの者共集りて、「猿よ唐人よ」と笑ひ居て埒明ず。され共、幸に懐中せし書付を取り出しみせて、漸白蛇を調べ帰けるが、	
③	1	a	然るに夜半ばかりに起出、	水垢離する善之丞を描く
		b	元より着がへともなければ、薄き布子一つ着て、素足にわらぐつはき、物すぎ道を只一人たどりけるに、	
		c	七日にあたる寅のときばかりに、宝前にいづく共なく、御年三十斗かと思へさせ給ふ公家一人、冠をめし、白き直垂、白き袴をめし、弓矢を持、白馬に乗りたまへるが顕れ給ひて、	
④	半	a	終日渡世のはたらきにつかれて臥けるゆへ、参詣の時刻をくれぬ事間有けり。仍て火繩に火をつけ、暮時より夜半過る迄の分限を積置、火繩を指の間にさしはさみて寝しかば、	
		b	風雪をおかし水をあびてぞ詣でける。	雪中歩く善之丞を描く
⑤	前半	a	其長八尺余りの赤鬼青鬼その間一町ばかりに追来りぬ。	
	後半	b	肝魂も消へ失せ道のほとりにたをれ伏しけるが、 二月二日の夜、薬師堂より観音堂への途中にて、齡八旬斗の山伏忽然と現じ来り、「汝父が重病をかなしみ、毎夜三所へ詣る事たぐひなき孝心なり。弥々信心怠らずば所願成就すべし」など、様々たふとき物語しか共、	
⑥	半		又或夜観音堂に通夜せしに、前庭にて大きにうなる音せり。さしのぞきて見候へば、頭は牛のごとくにて五間ばかりの翅ある者三つ、口より火焰を吐、羽たゞきして、堂中を目かけて直ちに来る。	
⑦	半		同六日観音堂に通夜せし寅刻ばかりに、其長堂の軒端とひとしきおそろしき姿の者八九人來り、(後略)	
⑧	1	a	ひそかに酒を調べ置、母に暇乞の酒をすゝめんと起しに行し内、不思議や此酒、人もさはらざるに残らずこぼれたり。善之丞詮方なく、物いふことも叶はねば、名残惜げに母を見やり、涙ぐみて立出けるが、(後略)	
		b	結構なる乗物二丁、供人三十人ばかりにて、堂の上までかきあげければ、堂内忽明らか成事白昼の如し。乗物より女性出給ふ。一人は三十歳ばかり、今一人は十七八と見えける。	
		c	十七八斗の美女見事成銚子に盃そへ持来り、酌取てすゝめ給ふを、おいしいゞき三献まで飲けるに、其味天の甘露もかくやと覚候。其配酌の女郎即立て面白く歌舞の袂をひるがへし、善之丞をなぐさめ給へり。	本文と相違
⑨	1	a	時に向を見れば、忽然として高座三ツあらわる。其上に御長七尺斗の地藏尊座し給ひて説法します。	
		b	八幡宮より薬師堂へ参る坂下にて、吹雪に逢ひ、路も見えわかず、吹かけの所へ行かゝり、一丈あまりの雪の中に落入り、上らんとすれ共叶はず、泣きさけべども甲斐なし。(中略) 例の孝心出けるに、ふ思議や、誰かはしらず忽ち上より髻を引上らる。	
		c	(不明。雪中で項垂れる善之丞と、顔を袖で抑える善之丞の母が描かれる)	本文と相違
⑩	半		則飛がごとく中を走り、しばしが間に薬師堂に着ぬ。	
⑪	前半	a	薬師堂より菩薩のかたちなるが十二人、幡天蓋などさしかざしたまひて、馬の前後をとりかこみて送り給ひしが、	
	後半	b	扱観音堂にて、馬よりおろし給りて、黒衣の御僧と見えしは、「我はこれ汝が氏神八幡なり」と光を放て飛去給ふ。	
⑫	1		忽ち堂内広大になりて白雲大に群起り、見るがうちに白雲ことごとく充塞せり。其雲の上左の方に弥陀の三尊各御長五尺余なるが往立し給へり。其次に観世音三十三体、いづれも御長五尺ばかりにて未敷蓮花を持し、金蓮に乗じて立給ふ。又薬師の十二神将と覚しきも見え給ふ。(中略) 次に又種々の御形なる神天、御手に幣帛、或は劍、或は鉾などの類持給ひて、凡五百体余、いづれも白雲に乗じ、御腰より上ばかり見え給へり。其中に殊に貴き御姿にて、白装束に白幣持給へるが、まちかく降たまひて (中略) 此時雲中に八幡大菩薩も前に排せし御姿にて影向します。	
⑬	半		地藏菩薩 (中略) 錫杖の柄を指し給ふ。則悦び取付候へば、(中略) 菩薩の乗給ふ蓮花の下には、白雲一屯常につきしがひて離れず、菩薩の御頂上を拝し候へば、御光闇夜に松明を見るが如く光四方にかゞやき、其余光菩薩の通り過させ給ふ御跡二町余もかゞやき候。	
⑭	半		幾千万といふ数も知ぬ罪人ども、物をもいはず下へへと真下りに行もの斗也。	
⑮	1		此山の中程に、居長二丈斗の老婆一人あり。其髪白くして膝のほとり迄たれ、肌膚白く片袒たり。眼の大き六七寸ばかり鏡の如くてかゞやく。(中略) 此老婆のうしろに大木あり。枝ごとに白き帷子のごときものあまた懸たり。此所へ罪人と覚しくて、男女夥しく群来る。	

挿絵 番号	丁数	コマ 記号	本 文	備考
⑩	半		獄卒其長八九尺ばかり、或は牛の頭、或は馬の頭の如く、惣身の毛剣の如く逆に生たり。身より常に焰もえ出、罪人を見て腕をいからし、互に呼はる声、雷の如し。罪人共これを見て、肝魂を失ひ、あきれ果たる体にて居たる所を、獄卒共罪人を一人も残さず覆臥に踏たをし、頭に爪を打立両方へ引さげば、(中略) 数万の罪人虚空に蹴あげられ、	
⑪	半	a	夫よりゆくさきに大河あり。(中略) 罪人ども此寒風に吹切られ頭手足など木の葉散が如く幾千万となく虚空より落ち来る。	
		b	(中略) 又腹の大なる罪人ども河原に啼居て、石をもつてをのれが頭を打わり、ながる、血を手をへうけのみて、(中略) 此中にひとりの罪人善之丞に近付て大地にひれふしいふやう、「我は四年以前に相果候、下人久五郎にて候。我此所にて昼夜限りなき苦をうけ候間、念仏の追善を頼み奉る」と、血の涙を流しけり。	
⑫	1		此山の頂上、野原の如くべうへとして平かなり。磐石を組あげて恰鉄門の如くなるあり。内に入てみれば二鬼居たり。各長一丈五尺ばかりなり。地藏尊此所を通り給へば、二鬼すなはち平伏せり。	本文と相違
⑬	1		夫より閻魔王宮に至りてみれば、閻王の御長数百丈の大山をみるが如し。其色赤くして髭胸もとまではへさがり、大なる笏を持ち端座して罪人共をにらみ給ふ様、いとおそろしく二目とは見られず候ゆへ、御装束の品は見えおぼへず候。大王の傍に官人と覚しきが束帯して百人ばかりも見えたり。(中略) 時に傍なる高さ台の上に、赤き首青き首二つ並びてあり。其一の首大音を出し、「何れの国の誰」とよばはりぬれば、獄卒共罪人の中へみだれ入、つかみ出して引来る。(中略) 其時大王震ふが如き大音にて、罪人を呵責し教諭し給ふ。	
			(閻王の後より一人の官人出て奥の方へ行。物を出て善之丞に渡さる。これを受とりて見候へば、其形桃果の如くにしてやはらかに、其色紫にして大さ茶碗程ある玉なり。)	
⑭	1		又焰の脇に席薦三畳舗に見ゆる明鏡三十三面あり。(中略) 獄卒中につかんで鏡の前につれ行見せしむれば、一生の悪事残なく鏡中ならはる。(中略) 地藏尊善之丞にも此鏡を見すべしと錫杖を中にあげてみせしめ給ふに、わが故郷の有様歴然としてみゆ。善之丞十三歳のとき近所の友達にいぎなはれ、八月二十三夜に他の畑に行、青大豆をぬすみ荷ひ帰りし体、ありへと鏡にうつれり。	
⑮	1		閻王宮の裏門と覚しき方をみれば、獄卒共大さ十間程成鉄の火車を挽来り、前の罪人二三百人づつ打乗せ、其車の下積には、男女の盲人を積重ね、獄卒九人して押出す。十間斗も挽出せば、をのづから猛火さかんにえ出、罪人のさけぶ声に随て、其火いよへさかんにへあがる。	
⑯	1	a	常に大なる火の雨降りて罪人の身にあたり、(中略) くるしむ事かぎりなし。	
		b	大山の上に美女あまた集り居て、麓なる罪人を招く。罪人共これを見て我さきにと山へかけ上るに、此山の草木みな剣のごとく、しかも下に向ひて逆まに生たり。 此剣葉に身をさかれ血に塗れながら泣々かの山頂にいたれば、美女どもやがて谷に下りて招く事事前の如し。	
		c	獄卒罪人を捕へ各一つの鉄棒を渡し「是にて汝等が食物を求むべし」と。諸の罪人をつかみ谷底へ投入れば、罪人共互に戦ひ天地も響くばかり也。 その折ひしぎし棒を取てその血を嘗て命を續ぐ有様也。	
		d	又大なる池あり。中に熱湯漫々と涌かへり、其音さへおそろしきに、上に鉄の細き橋かゝれり。獄卒罪人を責てこれを渡らしむるに、橋の中程より熱湯の中へころび落、身体ことへく煮くだけで、苦しむ事限りなし。	
		e	此地獄殊に暗き故、菩薩御手の宝珠を少しかたぶけ給へば、金色の光明三度迄獄中を照し給へり。	
⑰	1	a	罪人頭は人に似て胴体は牛馬の如くなる、数多あつまり居たるに、背に大石をつけ(中略) 獄卒、火焰の出る鉄棒を以て彼牛馬を敲き立る。	
		b	又すさまじき嘴ある、大鳥あまた飛来り、口より火焰を吐き、罪人共の首手足を嚙へ、八方へ引張て啄き食ふ様、いたましき事はん方なし。	
		c	又此所に男女の盲人あまた頭を地につけ、足を空にして立るあり。其髻の上に大磐石を置、さげびかなしむ所へ、又空より大磐石落来て、其上にあたりぬれば、忽ち火焰出て下の磐石も罪人も悉焼とろけて失ぬ。	
		d	一人の罪人に毒蛇八疋づ、取巻て血を吸ひ食ふ。又罪人の顔へ焰を吹かくれば、罪人甚くるしみさかぶ声夥し。(中略) かゝる所に忽ち涼しき風颯と吹来りぬるに、数多の罪人の内、女六人男二人立出るに、身に取巻たる蛇共はらへと解はなれ、八人ながら毒蛇の上を踏越てにげ去ぬ。菩薩仰けるは、「此八人の者共婆娑にてなき跡を弔らふ。追善の功德にて、今此苦を免れし也」	

挿絵 番号	丁数	コマ 記号	本 文	備考
②4	1	a	大なる池に氷はりみちて、其中に罪人首ばかり出し、氷にとぢられ居たるが、水底の物を拾ひあげんと、手をあげ候へば其まゝ氷つきてはなれず泣悲しめり。	
		b	又罪人を倒につるしをき、縄墨うちして肛門より鋸にて挽わる地獄あり。	
		c	又罪人を逆につりて、獄卒両方より鎚を以て打たゝき、つひに骨髓まで打砕かるゝ所あり。	
		d	又罪人の前に種々の飲食あらはれ、其中より火焰もえあがるを、獄卒罪人を責め、「此食物を是非に喰ふべし」と、鉄棒を以て打擲するあり。	
		e	又方面一里程なる深谷あり。其中には糞泥みち〜たり。(中略) 罪人共糞の中より頭を出し、くるしげなる息を衝く。其域黒煙のごとく立のぼり、四方に散じて臭き事たつふるのものなし。(中略) 爰に糞泥の中より、ひとりの罪人あたりの岩石をつたひて、漸善之丞に向ひ、くるしげなる声にていふやう、「我は汝が父善四郎が母なり。(後略)」など語る中に、又数多の虫身中に喰ひ入てくるしみ、血の涙を流して糞中に落入る。菩薩の仰に「是は糞湯地獄とて、念仏善法を誹謗する者墮する所也」と。	
②5	1	a	又方面二里程見ゆる池あり。其水の色真黒なり。中に一身八頭の毒蛇数限りもなく、頭をそろへ居たるに、虚空より罪人落来れり。見れば皆胴体を五尺斗の大釘にて打ぬかれたる也。其数多の罪人を、毒蛇あつまりて、各八方へ引はり口より火焰を吐き、大きに吼唵み候へば、罪人の身寸々に裂くだかる。	
		b	又熱湯地獄あり。谷深く磐石そびへ立り。下に広さ一里半程に見ゆる石の窟あり。諸の罪人この窟の中沸湯に落入て、身体こと〜く融け鑊の内をめぐる。此鑊に少しき口ありて熱湯ほそく流れ落。其下に小き河有。此河水は冷にて諸の罪人此河より甦り出つ。(中略) 窟の上に生かゝりたる大木あり。罪人ども此大木へ我先にと馳上る。時に此木の枝窟の上に撓みかゝりて、或は足ばかり沸湯にひたるもあり。腰より下煮らるゝも有て、(中略) 苦しき事絶る事なし。此所にてひとりの罪人、善之丞に近づきて、「我はこれ汝が伯母、市之丞が母也。(中略) 博奕を止念仏をつとめ我跡を弔ひくれよといふべし」といひて、涙をはら〜と流しけり。(後略)	
		c	又獄卒ども、数多の罪人の足をとりて逆になし、各二人の獄卒ありて両方に引張。一人の獄卒は糞門より熱湯をつぎ込に、忽ち口よりぬけ出て地に落ち、猛火もえ上れば、罪人の身体こと〜くとろけ尽ぬ。(後略)	
		d	又罪人の手を両方へ引はり、獄卒口より沸湯をそゝぎこめば、たちまち肛門へながれ出、罪人こと〜く融け尽く。(後略)	
②6	1	a	又地獄あり。鉄火車一輛、猛火さかにもえあがる。其中に一人の罪人、やけこがれて燧柱のごとく啼叫であり。菩薩の仰に「是は汝が父善四郎なり。(後略)」と。善之丞かゝる苦しきを見て、悲傷の思ひにたへず、五内腸を断がごとく、忽ち火中に飛入りて父の苦に代らんとするに、獄卒火車を飛が如く引去ぬ。	
		b	又殺生したる罪人なりとて、七八寸の大釘すさまじく、少もすき間なく立たる上を、徒跣にて追立られ、踏抜〜走るもあり。	
		c	又魚つりたる者なりとて、池中に罪人共ひたり居たるに、諸の魚あまた喰ひ入て、責なやます所もあり。	
②7	1	a	或所にひとりの罪人を、鉄の柱に縛りつけ、獄卒足にて踏へ、釘抜にて舌を抜候に、二尺もぬけ出泣さげ居たるあり。見候へば我里のいまだ存命なりし、何某といへる者なりき。(後略)	
		b	又血池地獄あまた所にあり。皆女人有て責をうけ其数甚だ多し。	
		c	或は篩をもつてふるひ、箕を以て簸る。或は臼にてつき砕くもあり。	
		d	又地獄あり。余獄よりも甚広大也。此地獄半分は剣刃空に向てはへ、半分は猛火さかにもゆ。空より無量の罪人倒に落来て、猛火にやかれ剣刃に身をさかれ大に叫ぶ。	
		e	又其長三里程なる大狗四疋あり。身より火焰出、口よりもほのほを吐く。(中略) 四疋の狗四方より罪人を追まわし、一所に追詰て四狗同時に吼る声、天地も崩るゝが如し。	
②8	1	又傍に其広さ限りもなく、大なる鉄の網をはれり。其内に数万の罪人を籠めをき、頭のあまたある獄卒外に並居て、大鑊数千をすへ置、手に〜磐石にて柄の長き杓を持、熱湯を網の上よりかけ候へば、雨の如く罪人の身にかゝり、骨肉焼爛して、頭より足下にぬけ出。罪人の泣さげぶ有様語るにことばなし。		
②9	1	それより、菩薩にしたがひ奉りて、又閻王宮へ帰りければ、かの印璽を返せと仰られしゆへ、わが心には、娑婆のみやげに持参いたし度候へども、閻王の御顔色あまりにおそろしく、其事申出がたく、玉をさし出し候へば、初に渡されし官人うけとり、奥の方へゆかれける。(後略)	本文と相違	
③0	1	菩薩の仰に「(前略) 今閻浮同行の人來迎にあづかりて往生を遂るゆへ、悦びて此門まで出迎へ給ふなり」と。かくて程なく阿弥陀如来巍然として、無量の聖衆に圍繞せられ、宝幢盤蓋をさしかざし、微妙の音楽を奏し、観音菩薩蓮台に往生人を乗せて来り給ふ。その新生の人の姿三歳ばかりの幼児の如く、はだへは水精の如く、内外すきとをり、いたいけなる形にて、手を合せ観音の御方に向ひ、ひざまづき心よげに見えける。菩薩も御いつくしみのふかき体、母の乳呑子を愛するに異ならず、大門までは引接の御よそほひ殊の外早く候。(後略)		
③1	1	a	又金銀七宝にて造りたる、宮殿樓閣あまたあり。(中略) 其一々の宮殿の中に、おの〜弥陀、観音、勢至、無量の菩薩いまして、説法し給ふていなり。	
		b	或は音楽を奏し、或は諸の飲食を備へ、遊戯逍遙の所もあり。(中略) 瑠璃地の上には、金銀水晶などの宝を以て、魚鱗の如く敷ならべたるに、	
		c	(中略) 菩薩の仰に「汝踏て見よ」とて、蓮華よりおろさせ給ふゆへ、一足ふみしかば、柔にしてくほみ入る事四五寸ばかり、その心よき事たとふべき物なし。	
		d	(中略) 又大なる宝の池あり。(後略)	

挿絵 番号	丁数	コマ 記号	本 文	備考
③②	1	a	宝池のほとりに一人の菩薩あり。宛転てなげき悶え給ふ。其前には弥陀如来観音勢至立給へり。後にはあまたの聖衆います。(中略) 仏の「御袖の下を見よ」と宣ひしゆへ、見しかば実も四十ばかりの婦人合掌して立たるあり。(中略) 宝楼宮殿ありて其山をとりかこみ、無数の菩薩遊戯逍遙し給ふ有。	
		b	或は此山空中に飛行する時も有。	
		c	(中略) 或は華籠のやうなる物に種々の妙花を入れて手にへ持し。虚空を飛行し来りて、又宮殿に積並べ給へるもあり。	
		d	(中略) つばみたる蓮華の内より、光明出るあれば、観音勢至あまたの菩薩、俱に来り給ひて、其花に向ひて説法し給ふに、花一つづ、開けり。其一葉の内にも数多の往生人あり。(後略)	
③③	1		菩薩の錫杖にすがりながら、宝池の上を通り、上品の中程と覚しき所へ参り、はるかに向ふを見やれば、池のあなたに金の山をみるがごとく、尊容、三体立給へり。菩薩の仰に「汝謹で拝し奉るべし。これ教主阿弥陀如来、観音勢至の二菩薩にてまします」と示し給ふ。(中略) 如来の御手は、当麻変相中台の御印相に似たる由也。(後略)	
③④	半		又極楽より、遙に下にあたりて世界あり。(中略) 万物の莊嚴もおとれり。菩薩の仰に「これは返地なり」と。(中略) 又はるか下の方に、南にあたりて世界あり。菩薩の仰に「これは懈慢国なり」と。	
③⑤	前半	a	其れより、菩薩に随て矢を射るがごとく、はるか下の方へ下ると覚へ候が、夢ともなく万勝寺村の観音堂に罷り在て、日あしを見れば七ツさがりなり。	
	後半	b	いつもより遅きとて、母半途まで迎に出候ゆへ、つれだち帰宅いたし候。(後略)	
③⑥	半		具に感見の事共語しに、父善四郎大きに疑惑をおこし、(中略) あまさへ悪口放言しけり。しかるに折しも、善四郎薬を煎じ居たりしが、其薬鍋忽ち自在といふ物よりはづれて、をのづから梁の上迄舞あがり、末倒に炉中へ落火を打消したり。(後略)	
③⑦	半	a	それより後善四郎ふかく信心を起し、無能和尚へ右の次第を申上、自身も日課三万遍を拝受し、誓て酒肉五辛博奕を相止候。母并に弟源之助も、同じく日課一万五千声を授る。	
		b	或夜の夢に、無能和尚来り給ひて「汝孝行の志深切なるゆへに我これを感じ、地獄極楽を見せしも皆わがなす所なり。(中略)」と、教へたまへり。	
③⑧	半		その、ち無能和尚所々勸化し給ふ節は、善四郎も参詣いたし候。和尚高座の上にて、毎度善四郎事、諸人に仰聞られ、念仏の力にて、悪病かくのごとく、快善したりとて、其姿を見せて示し給ひける。	
③⑨	半	a	享保七年寅極月朔日の夜には、人しれず裸はだしにて、雪踏分て和尚の御廟所へ参詣せしが、伊右衛門と申もの見付て、たがひに涙を流して驚き感じける。	
		b	前方観音堂通夜の節、見え給ひし女性の事、ゆかしくて折々思ひ出せしが、或夜夢中に、かの女性あらはれ給ひて、(中略) 観音の御姿であらはれ、ひかりを放て飛去給ふ。	
④⑩	半		極楽感見の後思ふやう「(中略) 捨身してなりとも、急ぎ浄土へ参らん」と思ひ定めし折節、蓮心といへる僧、其気色をみとめ、「『入水往生、焼身往生などは末代の人斟酌すべし』と、祖師もいましめ給へり。かまへて往生大切と思はゞ、捨身などゆめへあるべからず」と、念比に申聞しかば、其事おもひとまりぬ。	
④⑪	半	a	(前略) 仏菩薩の御告、無能和尚夢中に度々示現して、出家をすゝめ給ひし(後略)	
		b	仍て桑折大安寺におゐて剃髪し、法名直往と号す。	
④⑫	半	a	(前略) 後厭求に向ひ「先にはあまり有がたき物見候にて、極楽の事わすれがたく、とりみだし候て、わるき人々の笑はれ候はんも、面目なし」とぞ申ける。(後略)	
		b	或処にて、当麻曼荼羅を拝ませ候へば、手をうつて申候は「扱も是程に極楽によく似たる事あるまじ」とて、顔に感涙をながし候。	
④⑬	前半		かくのごとく、常に厭穢欣浄の思ひ、深切なりしかば、つひに元文二巳のとし、世寿三十六の春、半田村の庵室にて、数日断食し、勇猛に別時念仏を勤修し、三月十五日正念にして、往生の素懐を遂てけるとなむ〔追加〕。(筆者注：或いは「(前略) 相馬興仁蘭若に於て、堂頭和尚はじめ、門下の諸長老、府内の道俗男女集り、直往に面談ありて、一々上来の次第を聴聞ありて、(後略)」の部分か)	
	後半			

② 本文と挿絵の相違点

『感得伝』の挿絵は、『冥祥録』の挿絵を完全に踏襲する訳ではなく、当時の出版業界や世間の流行も意識していると推測した。それでは、挿絵と本文の関係性はどのようになっていたのか。前掲【表2】に、挿絵とそれに対応する本文箇所を纏めて表化した。その結果、『感得伝』では基本的に、本文の記述を忠実に挿絵化していることが見て取れた。

明確に本文と齟齬が生じているものとしては、

- ・挿絵⑧cで観音堂に参詣する善之丞を慰める女性ら（観音の化身）の役割が本文と異なる点
- ・挿絵⑨cにある雪中で項垂れる善之丞と、顔を袖でおさえる善之丞の母親が描かれる点

- ・挿絵⑱で大高山の頂上にあるはずの閻魔王宮の入り口で、本来は山の狭間であるはずの崖が龍のいる大河となっている点

- ・同⑱で獄卒が二鬼いるはずが、一鬼しか描かれていない点

- ・挿絵⑲【図4】で「玉をさし出し候へば、初に渡されし官人うけとり」とあるにもかかわらず挿絵⑲【図5】の冥官とは異なる点

の五点であった。二点目は『感得伝』の本文とは関連性がないもので、『冥祥録』にもこのような場面を表す記述は見られない。それ以外は絵師による本文の確認不足が要因と思われるもので、かつ物語の大筋の流れには影響はない程度の齟齬だった。しかし、三点目に関しては「熊野観心十界曼荼羅」等にも現世と地獄を隔てる三途の川には龍が描かれている。この先入観が、意図的か否かは不明であるものの、本文にない表現を挿絵にすることに繋がったのだと推測される。

③ 『感得伝』における地獄の特性

『冥祥録』及び『感得伝』で登場する地獄は、その多くが經典に依拠したものであるが、『冥祥録』で評注が設けられておらず、かつ前代の

地獄絵に類例が少ない地獄も数か所散見される。これらの地獄は、

- ・挿絵⑳c「人が悪事を働くのを見て喜んでいた者の地獄」

- ・挿絵㉑a「親に楯突いた者の地獄」

- ・挿絵㉒b「念仏をせず、我が子への痴愛の心が深い者、妻妾をひどく叱って盗んだ者の地獄」

- ・挿絵㉓c「魚を釣った者の地獄」

- 等、その罪状は日常生活を送る中で頻繁に見られるような卑近な罪状が設定されている傾向があった。これは、

- 善之丞が閻魔王宮で浄

- 玻璃鏡を見た際、嘗て

- 隣人の畑から青大豆を

- 盗んだ場面が映された

- ように、聴衆が自覚し

- やすい罪状で教上の悪

- を示している。身近



【図5】『孝子善之丞感得伝』上巻
(天明2年〈1782〉刊、早稲田大学図書館蔵)



【図4】『孝子善之丞感得伝』上巻
(天明2年〈1782〉刊、早稲田大学図書館蔵)

な例を用いることで、地獄に墮ちることの恐ろしさを喚起させるのは談義僧が説教をする際の常道であり、善之丞のような身分の庶民層や、彼らに説法をする僧侶らとの相性は良かったのだろう。割合としては多くはないものの、こういった身近な罪による地獄を挙げ、かつそれを挿絵として設けているところに、『感得伝』において地獄を表象する際の特徴が見える。

二 挿絵の表象と特色

近世初期から前期にかけては、『富士の人穴草子』や『伽婢子』等が、また近世を通じては『往生要集』等の諸本が版を改め多く刊行された。これらの諸本には挿絵が盛り込まれ、読者の興味関心を惹くと共に、内容の理解を促す役割も果たしていた。また、その図様は版を改めても被せ彫りにしたり、或いは類似した構図を流用したりすることが多く、読者の冥界に対するイメージの画一化に寄与したと思われる。

一方、『感得伝』の豊富な挿絵の中には、成立以前に刊行された仏書や仮名草子類の挿絵にはあまり見られない特徴や、一貫性のある特徴を持つ挿絵が見られる。本節では中でも閻魔王等地獄の登場人物の描写に焦点を当てた地獄の表象や、極楽の表象について述べる。

(一) 地獄の表象

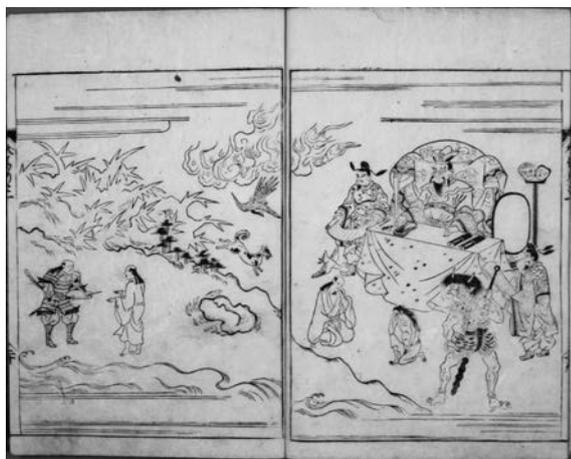
① 図の視点

閻魔王庁を描いた挿絵は、近世初期だと寛永四年(一六二七)に刊行された『ふじの人あな草紙全』初版本に始まり、仮名草子や『往生要集』等の絵入版本で散見される。「富士の人穴草子」に焦点を当てると、横山重氏、太田武夫氏によると、親本となった寛永四年初版本は、「富士草紙」(京都大学国文学研究室蔵)を参考にしたとされ、また、「富士草紙」はもと絵入写本であったが仕立て直したものであり、両氏らはこの

原拠には同内容の絵巻物があり、これらの何れかを参考にしたのではないかと推測している⁵⁹。このように出版文化が確立される以前の作例は、主に寺社で所蔵された六道絵等の絵巻、掛軸に限られていたため、版本の挿絵も先例を元に描かれることが多かった⁶⁰。

他に近世初期の作例と言えば寛文二年(一六六二)刊の『為愚痴物語』巻五「ある人、地ごくのゑを見し事」や元禄五年(一六九二)刊の『狗張子』巻一「北條甚五郎出家」の挿絵【図6】等があるが、何れも絵巻や掛軸で俯瞰した視点で描かれたころの流れを汲み、見開き内に人物・事物が収まるよう整然と描かれ、言い換えれば迫力に乏しい印象を受ける。これは図様を踏襲して再版することの多い『往生要集』や、他の仮名草子類も同様で、近世も半ばの寛延二年(一七四九)刊『英草紙』【図7】でも、年月を経ることによる人物描写等の違いはあれど、視点は近似していると言える。

一方の『感得伝』では、見開きの挿絵内に収まりきらない様子で描かれており、それまでの仏書や仮名草子類の挿絵とは異なっている【図4】【図5】。『感得伝』と同時期の作例は、元禄二年版の再版本とされる寛政二年版『往生要集』を除くと⁶¹、山東京伝作・画、寛政元年(一七八九)刊『一百三升芋地獄』



【図6】『狗張子』巻一「北條甚五郎出家」
(元禄5年(1692)刊、早稲田大学図書館蔵)

や、同年刊の『小野篁地獄往来』
 【図8】等の草
 双紙は、厳密に
 言えば經典に説
 かれる本来の地
 獄とは異なるこ
 ころも多いが、
 『感得伝』と同
 じく俯瞰の度合
 いは抑えられて
 いることが見て
 取れた。『感得
 伝』は『冥祥録』
 を婦女子向けに
 すべく挿絵を増
 やしたものであ
 るため、場面も
 独自のものでは
 あるが、その際『往
 生要集』や他の
 經典、仮名草子
 の中から描かれ
 る人物等の構図
 は流用していて
 も、描き方を踏
 襲せず、絵師が



【図8】『小野篁地獄往来』(寛政元年〈1789〉刊、東書文庫蔵) 【図7】『古今奇談英草紙』卷三(寛延2年〈1749〉刊、国文学研究資料館蔵)
 【E1・4-3-6-962】、CCBY-SA4.0 【ナ4-654-3】、CCBY-SA4.0
 「新日本古典籍総合データベース」より 「新日本古典籍総合データベース」より

独自に考案し描いたことが推測される。

② 人物描写

地獄における象徴的な人物として、閻魔王の存在が挙げられる。閻魔王は十王による死後の裁判やこれに基づく信仰、そして地藏菩薩と同一視された等の背景から、古くから六道絵や十王図等の地獄絵に描かれた。出版文化の確立後は、版本の挿絵でも描かれるようになる。凡そその絵柄は、閻魔王の横には亡者の生前の姿を映す浄玻璃鏡、亡者の生前に犯した罪と善行を記録する檀茶幢があり、周囲に地獄の官吏である冥官や、獄卒が控えているという傾向で、『感得伝』でも同様の人物らが描かれている。

しかし閻魔王の姿を比較してみると、先ほど挙げた読本等の挿絵では、閻魔王の体格は余人と比べて大きいとは言え全身が画面内に収まっているのに対し、『感得伝』では見開きの挿絵の中で、何れも半丁の大半を割いて閻魔王を描いており、その容貌も胸元から顔までの上半身を大きく印象的に描いていることが見て取れる【図4】【図5】【図9】。

読本等の挿絵の先例となった中近世に描かれた地獄絵は、掛軸や卷子という大きく広い画面を持つ性質上、他の場面を描くこともあり、任意の物事や人物が画面に占める割合は必然的に小さくなる。一方、『感得伝』が刊行された天明年間前後は、役者絵・美人画の領域で新たに大首絵の様式が隆盛し始めた時代であった。一筆斎文調と勝川春章の合作による明和七年(一七七〇)刊行の役者絵本『絵本舞台扇』をはじめ、後に安永後期から天明初期にかけての春章作「東扇」シリーズ等が大首絵の先駆的作品として位置付けられている。特に後者は、『感得伝』の刊行年とも時期が近い。本来大首絵は、画題となった人物を間近で鑑賞したいという考えに応じて生み出されたものと言われている。ある意味では刷物や版本ならではの表現方法と言えるが、『感得伝』ではこの方法を閻魔王という地獄の象徴的な人物の大きさと威容を示すために用いたので

はないかと考えられる。

また、閻魔王以外の人物に関してだと、地獄極楽において、善之丞を含めた人物の等身が低く、十五歳という年齢に見合わず幼げに描かれていることが見て取れる【図4】【図5】【図9】。しかし、本文には地獄極楽巡り中の善之丞の心情を表す文章はあっても、身体の変化を示すような一文はない。また、仏書や仏教絵画で地獄極楽巡りをする人物が子供らしくなるといった記述・描写のある作例は管見の限り例がない。そのためこれは、地獄極楽では呵責をされる人間やそれを見て回る善之丞より、冥界の登場人物や各界の様相こそが人々の興味関心を惹くと絵師が判断した故に、獄卒らと比較すると善之丞らは小さく描かれたのだろうと推測される。或いは、絵師の中で地蔵菩薩と子供というモチーフの源流に、賽の河原で地蔵菩薩の足元に身を寄せる幼子の姿があり、意図せず善之丞を幼げに描いてしまった可能性も指摘出来るが、比較対象がないためここでは可能性を提示するのに留めたい。

(二) 極楽の表象

「当麻曼荼羅」は浄土変相図の一種で、その成立に関わる中将姫伝説の知名度とも相俟って、浄土の様相を示した図像として絵解きや版本に



【図9】『孝子善之丞感得伝』上巻
(天明2年〈1782〉刊、早稲田大学図書館蔵)

よって親しまれてきた。同曼荼羅は直往(出家後の善之丞)が「如来の御手は、当麻変相中台の御印相に似たる由也」⁶²、「或処にて、当麻曼荼羅を拝ませ候へば、手をうつて申候は「扱も是程に極楽によく似たる事あるまじ」とて、頻に感涙をながし(後略)」⁶³とあるように、その関係性が本文で明確に示されていることに加え、極楽を描いた挿絵との共通性が見られる。宮腰直人氏は『感得伝』の極楽の挿絵は「当麻曼荼羅」の図像そのものであると指摘し、『当麻曼荼羅科節』(天和二年(一六八二)刊)等の挿絵入り注釈書との関わりを示唆した⁶⁴。しかしながら、『感得伝』と「当麻曼荼羅」の間にある極楽の表象の具体的共通性にはまだ検討の余地がある。

そのため本論では、挿絵付き解説本の中でも『当麻曼荼羅科節』よりも『感得伝』に刊行年が近く、かつ同じ版元から出版されている『搜玄疏図本』の挿絵を参考に比較していきたい。なお、本論における「当麻曼荼羅」を構成する各場面の名称は日沖敦子氏の表現を⁶⁵、より詳細な項目については『搜玄疏図本』の通りに記載した。

同曼荼羅は、典拠とした『観無量寿経』の構成から、大別して四つの構成となっている。

- ・ 向かって左側の下から上へと続く「序分義」
- ・ 右側の上から下へ続く「定善義」
- ・ 下部の右から左に続く「散善義」
- ・ 中央の阿弥陀浄土図

更に、この阿弥陀浄土図は、下から①宝地段(父子相迎会、舞楽会)、②宝池段、③宝樹段、④三尊段、⑤宝楼段、⑥光変、⑦虚空段に分けられる。『感得伝』の極楽の挿絵はこの阿弥陀浄土図と類似している。

なお、挿絵³⁰、³⁴については、「当麻曼荼羅」に共通する場面が見られないため、本論では省略する。

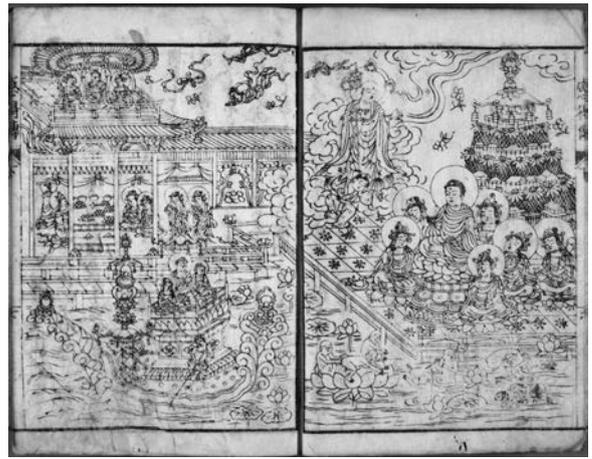
まず挿絵³¹【図10】を見ていきたい。同図は宝池に浮かぶ船、蓮華に



【図12】『当麻曼荼羅搜玄疏
図本』(安永3年<1774>序)
半丁部分のみ



【図11】『当麻曼荼羅搜玄疏
図本』(安永3年<1774>序)
半丁部分のみ



【図10】『孝子善之丞感得伝』下巻(天明2年<1782>刊)



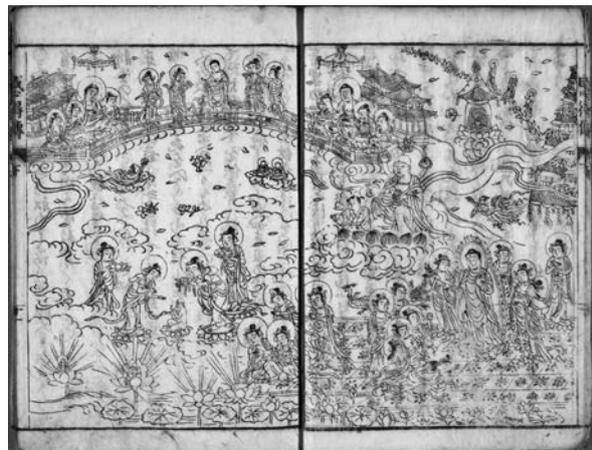
【図14】『当麻曼荼羅搜玄疏
図本』(安永3年<1774>
序)半丁部分のみ



【図13】『当麻曼荼羅搜玄疏
図本』(安永3年<1774>
序)半丁部分のみ



【図16】『当麻曼荼羅搜玄
疏図本』(安永3年<1774>
序)半丁部分のみ



【図15】『孝子善之丞感得伝』下巻(天明2年<1782>刊)

【図10】～【図16】 早稲田大学図書館蔵

乗る童子、瑠璃地の宝地に宝樹と聖衆、宮殿楼閣で説法を聴く、或いは飲食を供える菩薩らが描かれる。これは、「当麻曼荼羅」の阿弥陀浄土図の中でも池中右宝船会【図11】、池中左八童證真会【図12】、中上中見聞法会【図13】と、左辺八地證入会【図14】をもとにして考えると考えられる。『感得伝』では瑠璃地の上に善之丞と地藏菩薩が加えられるため、仏・菩薩らがやや手前に描かれ、紙面の構成上、童子が本来八尊であったのを五尊に減らし、位置を菩薩らの手前に移動させ、空いた上方に宮殿を描く。菩薩の装身具等、細かな相違点はあるものの、ほぼ「当麻曼荼羅」の各図を組み合わせている。

挿絵③②【図15】は往生した子供が母親と再会する場面、菩薩が説法した蓮華から生まれる往生人、飛行する宮殿楼閣、同じく空中にある反橋とそこを歩く聖衆らがいる。対応するのは、母子の再会は父子相迎会とも言われる下下中見聞法会【図16】、空中の反橋は左辺及び右辺八地證入会中央の橋【図17】と観音及び勢至光変親友示現会【図18】を組み合わせたものである。父子相迎会と『感得伝』の母子の再会を比較すると、『感得伝』では阿弥陀如来の袖の下に小さな婦人（伏して感涙する菩薩の往生した母親）が加えられていることが見て取れるが、それ以外に関しては一致している。従来父なる如来と新生の往生人たる子の再会の場面であるのを、『感得伝』では如来による母子の再会としている点については、理由は判然としないが興味深い点である。作中で善之丞の父親は仏教を誹謗する不信心者であったのに対し、母親は息子を思い助ける存在であったことをなぞらえているのだろうか。また、橋や宮殿、仏や菩薩らも姿勢等両作同じである。しかしながら、挿絵③②dの説法した蓮華から生まれる往生人に関しては、「当麻曼荼羅」に対応する図像はないようである。飛天や楼閣は浄土変相図で頻繁に描かれるモチーフであるため、ここでは省略する。

挿絵③③【図19】は阿弥陀三尊で、阿弥陀如来は顔の下半分から上半身

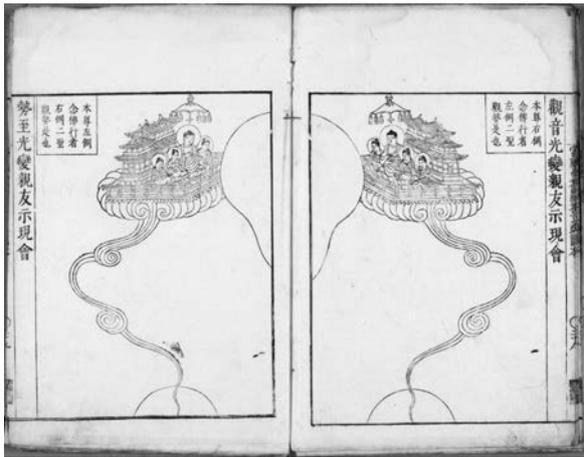
までを見せ、印相は説法印（転法輪印）で、掌に千輻輪がある。向かって右に観音菩薩、左に勢至菩薩の脇侍が控える。阿弥陀如来の示す印相は一般的に來迎印や定印であることが多く、説法印を示す「当麻曼荼羅」は阿弥陀如来を描く仏画の中では比較的珍しい【図20】。また、阿弥陀如来の口髭の有無の違いはあるものの、脇侍の印相も両作一致している【図21】。以上の点から、善之丞の口述した本文のほか、林丹治が描いた極楽の挿絵四・五丁分のうち三丁分と、その大半において、「当麻曼荼羅」と共通する図が見られた。林丹治が本文の記述に従って、「当麻曼荼羅」の何れかの諸本か、同版元から出た『搜玄疏図本』等の解説本を参考に極楽部分の挿絵を描いたのは明確であると言えよう。

三章 再版本の展開

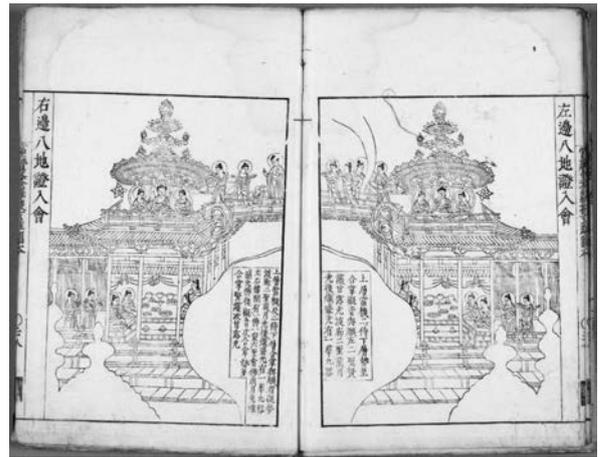
『感得伝』は初版本が刊行されて以降、管見の限り四度再版された。それが、以下で詳述する

- ・天明五年（一七八五）再版本（以下、天明五年版と略称）
- ・刊記不明本（以下、版元名に基づき永田調兵衛版と略称）
- ・明治二九年（一八九六）新刻本（以下、明治二九年版と略称）
- ・明治三六年（一九〇三）再版本（以下、明治三六年版と略称）

の四種である。天明五年版は本論の冒頭で触れたように武蔵野文化協会から江戸東京博物館に寄託されている資料（資料番号〇二二五二五〇〇、〇二二五二五〇一）のほか、愛知県岡崎市細川町の蓮性院と、広島大学図書館が所蔵している。刊行年は前後するが、明治二九年版は内村氏が架蔵されていることもあって存在を指摘されているが⁶⁶、詳細については言及されていない。また、近世文学の研究者である横山邦治氏が所蔵されており、こちらは新日本古典籍総合データベースで公開されている⁶⁷。永田調兵衛版は國學院大學、ベルリン国立図書館⁶⁸、弘前市立弘



【図18】『当麻曼荼羅搜玄疏図本』(安永3年〈1774〉序)



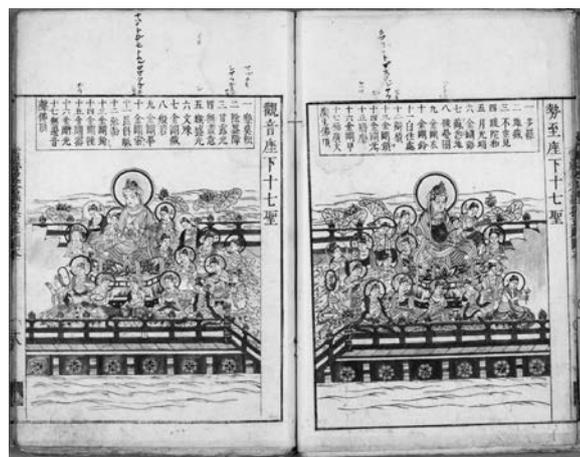
【図17】『当麻曼荼羅搜玄疏図本』(安永3年〈1774〉序)



【図20】『当麻曼荼羅搜玄疏図本』(安永3年〈1774〉序) 半丁部分のみ



【図19】『孝子善之丞感得伝』下巻(天明2年〈1782〉刊)



【図21】『当麻曼荼羅搜玄疏図本』(安永3年〈1774〉序)

【図17】～【図21】 早稲田大学図書館蔵

前図書館⁶⁹が所蔵し、明治三六年版は國學院大學に所蔵されている。

なお、『国書総目録』で『感得伝』の項目を確認すると、享保八年版があると記載されている。同項目では富山大学ヘルン文庫本と福島県立図書館本の二種を享保八年版として示しているが、福島県立図書館本は後小路氏が既に天明二年版であることを指摘している⁷⁰。また、富山大学ヘルン文庫本は新日本古典籍総合データベースで公開されているが、ヘルン文庫の目録によると明和二年の序を持ち、京都の藤井文政堂から刊行されたものと目録に記されている⁷¹。その一方で、本書は下巻奥付には刊記を載せず、澤田吉左衛門を版元とし、跋文には天明二年と記された初版本とほぼ同内容のものであることに加え⁷²、同大学の前身である旧制富山高等学校時代に編集されたそれ以前の目録には、「享保八年跋」と記載されていた⁷³。ヘルン文庫本は本文の字体や挿絵等から、天明二年版と同じ版本か、或いは被せ彫りしたと推定される。加えて、巻末の目録の内容が、早稲田大学図書館が所蔵する二種の版本のうち、目録の内容が少ないものと一致している⁷⁴。このことから、富山大学本も初版本刊行から時を経ずに刊行されたものと推測されるため、本論では扱わないこととする。

天明二年版と同五年版は、さほど間を置かずに刊行されている。一方、明治二九年版と同三六年版は初版発行から一世紀以上もの時を経て刊行されており、初版前後の版本は既に失われていたと考えられる。新たに版本を用意し新刻するのは、再版する以上に時間を要するはずだが、何故何度も刊行されたのか。再版本の比較検討を踏まえて、その広がりから背景を考察したい。

一 天明五年版

(一) 所蔵先の概要

天明五年版の所蔵先は複数あり、江戸東京博物館寄託本(資料番号

〇二一五二五〇〇、〇二一五二五〇一。以下、江戸博本と略称)、愛知県岡崎市細川町蓮性院蔵本(以下、蓮性院本と略称)、広島大学図書館蔵本(以下、広島大学本と略称)が確認出来る。

江戸博本は武蔵野文化協会の所蔵で、江戸東京博物館に寄託されている。元々は、小説家・民俗学者として知られる藤沢衛彦氏の旧蔵品であった。蓮性院本を所蔵する細川町蓮性院は浄土宗の寺院で、明徳三年(二三九二)に細川頼之によって先祖の菩提を弔うために建立された。その後、文明十二年(一四八〇)に松平親忠が土地を寄進、また後の細川城山城主松平久助信乗が再興した。近世は同市内鴨田町にある大樹寺の末寺だったという⁷⁵。蓮性院のある細川町は中近世にかけ大名として活躍した細川氏の発祥の地であり、その由緒もあって山号は細川山となっている⁷⁶。

広島大学図書館が所蔵する広島大学本は請求記号を「大國二三二八」としているが⁷⁷、これは元々昭和四年(一九二九)に設立された旧制広島文理科大学時代に収書されたことを示しており、同本は昭和二〇年(一九四五)に広島を襲った原子爆弾から焼け残った資料である⁷⁸。

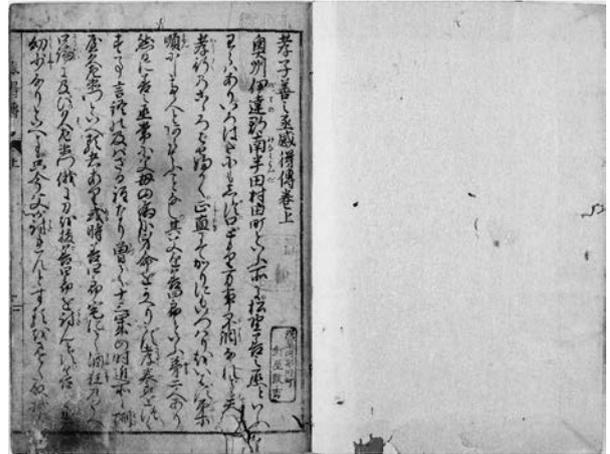
(二) 天明五年版の特徴

天明五年版は京都の版元・澤田吉左衛門と江戸の版元・山崎金兵衛の共同出版であり、管見の限り二種類が確認されている。即ち、見返しに続いて本文が始まるもの(江戸博本、蓮性院本)【図22】と、見返し部に奥付とは別に澤田吉左衛門のみの版元名と蔵版目録を有するもの(広島大学本)【図23】がある。

広島大学本の蔵版目録には、『聖徳太子伝図絵』全部六冊、『賢問子行状』同五冊、『同誓願寺縁起』同二冊、『真俗仏事編』全部六冊とその紹介文、『和字選択集』、『女人往生利益章』、『勸化本義』が紹介されている。『賢問子行状』と『誓願寺縁起』は寛政五年(一七九三)にそれぞれ刊

行されており⁷⁹、両書が初版本と断定することは困難だが、その蔵版目録がある広島大学本の方が江戸博本・蓮性院本よりも後刷である可能性がある。

見返し部の蔵版目録や後付を除くと、天明五年版は上巻五二丁、下巻四一丁で、挿絵は上巻二五丁分、下巻は十丁分ある。本文と挿絵の構成・内容共に、天明二年版と一致している。また、本文や挿絵の筆致から、版本そのものは天明二年版と同じか、被せ彫りをしていることが確認出来る【図24】。しかし、天明二年版では、その後の奥付で七丁にわたって「華頂山御蔵版目録」と「皇都書林麗澤堂蔵版標目録」が続くのに対し、この天明



【図22】 02152500『孝子善之丞感得伝』上巻(天明5年<1785>刊、武蔵野文化協会蔵、江戸東京博物館寄託)

【図23】 『孝子善之丞感得伝』上巻(天明5年<1785>刊、広島大学図書館蔵)

五年版では半丁内に「感得伝助刻擬」と共に、刊記・版元として「天明五年乙巳孟秋／東都本石町十軒店／山崎金兵衛／京都知恩院古門前／澤田吉左衛門」と記されるに留まる【図25】。

この「感得伝助刻擬」には、了蓮社明誉上人をはじめとした僧侶の蓮社号・誉号等が名を連ねる⁸⁰。何れも高僧であることに違いはないが、蓮社号・誉号のみの場合が多いため、正確に比定することは難しい。判明している範囲で例を挙げると、「了蓮社⁸¹明誉上人」は、東京都文京区小石川の浄土宗無量山傳通院の第三四代住職となつた忍達で⁸¹、「了蓮社向誉上人」は京都の円通寺、転法輪寺を



【図24】 02152500『孝子善之丞感得伝』上巻(天明5年<1785>刊、武蔵野文化協会蔵、江戸東京博物館寄託)



【図25】 02152501『孝子善之丞感得伝』下巻(天明5年<1785>刊、武蔵野文化協会蔵、江戸東京博物館寄託)

建立した、捨世派閥通流の祖、閥通だるう⁸²。また、「瓔珞敬首大和上」は、浄土宗興律派の高僧で正受院の住職を務め、後に瓔珞庵を結んだ敬首であると考えられる⁸³。なお、閥通は敬首に師事し、菩薩戒を授かっている。ここに挙げた僧が活躍した場所は江戸・京都を問わないが、何れも天明二年版が刊行される以前に遷化している。『冥祥録』にある「孝感冥祥録喜捨助刻名位」には当該人物らの蓮社号・誉号はなく、また法名が判明している敬首も記載されていないことから、『冥祥録』刊行後、遷化する以前に『感得伝』の刊行を支援したのだろう。

また、江戸における版元の山崎金兵衛であるが、山金堂と称して『繪本花葛蘿』や『繪本千代松』等、鈴木春信の絵本を多く刊行したことで知られる。藤澤紫氏の『鈴木春信絵本全集―研究編―』には、春信の絵本の本文から、蔵版目録までの全文を記載した翻刻編が掲載されている。これを参考に山金堂の蔵版目録を確認すると、少なくとも明和五年（一七七八）刊『繪本春の友』⁸⁴、明和七年（一七八〇）刊の『繪本福神浮世袋』⁸⁵、明和八年（一七七二）刊の『繪本春の錦』⁸⁶の計三冊において、『澤水和尚法語』、『一休和尚法語』、『同水か、み』、『同骸骨』、『九相詩』、『大般若經壳所』、『同序集法則』、『最勝王經かなつき』、『同ひらかなつき』、『同縁起』、『心経』、『九重のまもり』、『観音経』、『地藏経』、『血盆経』、『壽命陀羅尼』、『聖天窶誓伝』等の仏書の記載が確認された。無論、これ以外にも絵本や手習、文芸、医学、卜占等に関する記載があり、内容は仏書に限らない。しかし、一般的に春信の絵本を取り扱う印象が強い山金堂であるが、この目録からは取り扱う内容は多岐に渡っていたことが分かる。仏書の中でも經典に限って見れば、禅宗、臨済宗、密教、法相宗等、宗派に依らずに手広く取り扱っていることから、特定の宗派の御用書林としてではなく、大衆に人気のある諸本を揃えたのであろう。言い換えれば、『冥祥録』から『感得伝』に改められることで、山金堂のような大衆向けの版元と共同出版することになり、更なる流布に繋

がったのだと推測される。

(三) 分布

なお、本論で参考とした諸本のうち、江戸博本、蓮性院本には、旧蔵者を示す蔵書印や墨書がある。江戸博本には「浅草阿部川町／釘屋政吉」の蔵書印があり、藤沢衛彦氏以前の所蔵者もまた東京近郊にあったことが分かる【図22】。

一方蓮性院本は、上巻一丁表に白舟書体角印で蔵書印らしきものが捺され、また五二丁裏に「遍照寺／玉誉代」と墨書・押印があり【図26】、また下巻奥付の裏には「天明／鴛鴦山／徧照寺／玉ヨ伐」⁷⁴（筆者注…代の誤字か）【図27】、裏表紙に「天保七丙申年／玉誉」と墨書がある⁸⁷。遍照寺は現在の所蔵元である蓮性院の隣の豊田市にあり、徒歩圏内の程近い距離にある浄土宗の寺院であるため、同地域同宗派の僧侶らの交流や繋がりを見る上での手掛かりになる。また、浄土宗の僧侶間で関心が寄せられていたことの証であると共に、天明五年版巻末の「感得伝助刻擬」に名前の挙がる僧侶らも含め、寺院間、僧侶間の親交や師弟関係から探れば、作品の流布の過程、より詳細な分布等を明らかにする可能性があるが、こちらに関しては別稿に譲りたい。

【図26】『孝子善之丞感得伝』
上巻(天明5年(1785)刊、
愛知県蓮性院蔵、大島隆
獅氏画像提供) 半丁部分
のみ

二 永田調兵衛版

(一) 内容と版元

永田調兵衛版は國學院大學所蔵本(以下國學院大學本と略称する)とベルリン国立図書館所蔵本に見られる巻末の蔵版目録が少ない版と【図28】【図29】、弘前市立弘前図書館所蔵本(以下、弘前図書館本と略称する)に見られる「皇都書林文昌堂蔵版目録」が三丁続く版の二種類が存在する【図30】〜【図33】。目録を除いて上巻五二丁、下巻四二丁ある。挿絵は、上巻に二五丁分、下巻に十丁分あり、本文や挿絵の構成・内容から天明二年版を被せ彫りにしたものと見られる【図34】。

版元である永田調兵衛は、浄土真宗を主とした仏書専門の御用書林であり、慶長年間に創業し、現在も永田文昌堂として京都市で営業を続けている。初版本と天明五年版の版元である麗澤堂澤田吉左衛門は、少なくとも明治三八年(一九〇五)の岩脇明元『住蓮山安楽寺鹿ヶ谷因縁談—一名松蟲鈴蟲物語—』が刊行されるまでは版元として活動していたことが確認出来ている⁸⁸。そのため、版元が倒産したのではなく、初版発行後の当主が板株を売却した先が、同じ京都の書肆の永田調兵衛であったということだろう。

同書は本文末尾の跋文のみを有し、続く蔵版目録や奥付には刊記が書

【図27】『孝子善之丞感得伝』下巻(天明5年〈1785〉)刊、愛知県蓮性院蔵、大島隆獅氏画像提供

かれていない。

(二) 年代

巻末の目録の内容を手掛かりに、おおよその年代を比定する。國學院大學本の目録には、『三国七高僧伝図絵』、『親鸞聖人御一代図絵大本絵入平仮名付』、『三界義誘蒙』と各本の題と要約が記載されている。このうち、『三国七高僧伝図絵』は見返しに万延元年(一八六〇)の刊記が記されたものが、前後関係は不明だが西村九郎右衛門と永田調兵衛の名でそれぞれ刊行されているほか⁸⁹、早稲田大学図書館蔵の同書の目録には、共同出版した版元の中に永田調兵衛が名を連ねている⁹⁰。となると、永田調兵衛版『感得伝』は万延元年より後に刷られたと見て良いだろう。

(三) 分布

本論で参考にした國學院大學本も、上下巻裏表紙に墨書がある。墨書は「三河国□□(額田)郡／舞木村／永證寺／什物」【図35】、「三河国／舞木邸／永證寺／什物」と同様の内容が書かれており、本書も現在の愛知県にある浄土宗の寺院・永證寺に伝来していたと理解出来る。

弘前市立弘前図書館の福井敏隆氏⁹¹によると、弘前図書館本には下巻裏表紙に見せ消ち状態で「式卷之内／浄安寺／長尾／持主」と書かれているが【図33】、同書は、市内の古文書の収集家であった岩見常三郎氏(慶応三年—昭和二二年(一八六七—一九四七))⁹²が収集したもので、同館に寄贈された岩見文庫の一角をなすという。また同氏曰く墨書の浄安寺とは、現在の西津軽郡深浦町関に所在する浄土宗の浄安寺を指していると考え、元々は伝来していたと推測される。同書は管見の限り『感得伝』が所蔵される都道府県の北限である。

【図30】『絵入／孝子善之丞感得伝』下巻(万延元年〈1860〉頃刊、弘前市立弘前図書館蔵) 目録(部分) 半丁部分のみ

【図29】『絵入／孝子善之丞感得伝』下巻(万延元年〈1860〉頃刊、國學院大學蔵) 筆者撮影 半丁部分のみ

【図28】『孝子善之丞感得伝』下巻(万延元年〈1860〉頃刊、國學院大學蔵) 筆者撮影 半丁部分のみ

【図32】『絵入／孝子善之丞感得伝』下巻(万延元年〈1860〉頃刊、弘前市立弘前図書館蔵) 目録(部分)

【図31】『絵入／孝子善之丞感得伝』下巻(万延元年〈1860〉頃刊、弘前市立弘前図書館蔵) 目録(部分)

【図34】『孝子善之丞感得伝』上巻(万延元年〈1860〉頃刊、國學院大學蔵) 筆者撮影

【図33】『絵入／孝子善之丞感得伝』下巻(万延元年〈1860〉頃刊、弘前市立弘前図書館蔵) 目録(部分)

三 明治二九年版

(一) 版元

明治二九年版の下巻の奥付には、

明治廿九年四月十五日印刷／同年四月廿五日発行／京都市下京区下珠

数町／東洞院西入橘町八番戸校正兼発行者／西村九郎右衛門

大売別所／東京哲学書院／大阪金尾種二郎／長浜中村藤平／大垣岡安

慶助／名古屋三浦兼助／越後三条樋口小左衛門／熊本長崎次郎／盛岡

池野藤兵衛／高岡學海堂／福井万司曾平／金沢近田太三郎／花巻梅津

喜八

とあることから、版元を京都市の西村九郎右衛門に変えており、また後述するが、版木を新たに刷り出されたものである。『感得伝』の板株は依然として京都にある版元が所有していた。

西村九郎右衛門は寛永年間から大正十二年（一九二二）まで続いた老舗の版元であり⁹³、江戸期は丁子屋、空華堂、明治期からは護法館と称した。浄土真宗東本願寺派の御用書林として、同派の仏書や僧侶の著書を主に取り扱っていた。版元間の認識としては、『感得伝』は仏書に類されていたと考えられる。

なお、本論で参考にした明治二九年版には、奥付に続いて、護法館西村

【図35】『孝子善之丞感得伝』
下巻(万延元年〈1860〉頃刊、
國學院大學蔵) 筆者撮影

九郎右衛門版元として本数冊を紹介した目録がある

【図36】。ここに

ある書物は全て、西村九郎右衛門より先んじて別の版元で刊行されている。時代順に並べると、明治十二年

(一八七九)に伊藤清九郎が米沢智

洞著『真宗通俗瓦

礫集』を⁹⁴、明治

二二年(一八八九)

に実語教会が佐々木徹周著『安心評義弁』を⁹⁵、明治二〇年(一八八七)に

は環翠堂⁹⁶が佐々木徹周著『秦鏡録』を既に刊行していた。ここから、西村

九郎右衛門が活発に売却されていた板株を獲得していたことが見て取れる。

(二) 本文と挿絵の特徴

この明治二九年版は目録等除いて、上巻五三丁、下巻四三丁で、挿絵は上巻に二四丁分、下巻に十丁分ある。

明治二九年版は、初版本並びに天明五年版における挿絵⁹が見えないことに加え、本文の筆跡や改行後の文頭語が異なること、挿絵においても写し崩れが多々見られることから、版木を新調したことが伺える。また、本文は字の大きさや行間までも忠実に写した訳ではないため、徐々にズレが起り、下巻に至って挿絵と本文の順序が前後している場面も

【図36】『孝子善之丞感得伝』下巻
(明治29年〈1896〉刊、横山邦治氏蔵)「新日本
古典籍総合データベース」より目録、一部改変(本
紙に添付の値札トリミング)

ある⁹⁷。既刊本の版木を新調する場合は被せ彫りをするのが一般的であるが、明治二十九年版は天明版の挿絵を手描きで下絵として写し、参考にしたのだろう。

挿絵の詳細を述べる。挿絵全体として構図そのものは踏襲しているものの、比較すると全体的に衣服の皺やたるみの線が太く、人物の輪郭線も硬質である。各場面に目を向けると、地藏菩薩や善之丞をはじめ、同一人物でも等身や容貌の差があつて描き方にむらがある【図37】【図38】。また、屋内に置かれた櫃のアウトラインが過度に湾曲し構造上不自然な点もあり、技巧の面で不完全さが感じられる【図39】。さらに、岩石や背景等場面によって暗色を多用する差異もあり、同一人物の等身・容貌の差も併せて鑑みると、複数人が下描きの段階で関わった可能性もある。加えて、天明版両作では出家前の善之丞の服装は一貫していたが、明治二十九年版では二度変わつており、それまでの天明版と同じく緋風の模様の着物から、格子模様のものへと変化している【図37】【図38】。それ以降、地獄極楽巡りから帰還し家に帰るまで、善之丞はこの着物で一貫して描かれている。なお、明治二〇年に摺り出された「皇国二十四功」の「信濃国の孝子善之丞」でも類似した格子模様の着物を着用した姿で描かれており、両作の間で共通要素があると言える。明治二十九年版は「皇国二十四功」より後に刷り出されているため、これを意識していた可能性も考えられる⁹⁸。

【図37】『孝子善之丞感得伝』上巻(明治29年〈1896〉刊、横山邦治氏蔵)「新日本古典籍総合データベース」より、半丁部分のみ

四 明治三六年版

(一) 内容

明治三六年版は上巻五二丁、下巻四一丁あり、挿絵は上巻に二五丁分、下巻に十丁分ある。裏表紙の裏には、版元を記載した奥付が付されている。また、明治二十九年版と異なり、天明版を被せ彫りして、本文・挿絵共に細部に至るまで極めて忠実に模している【図40】。ここから、明治二十九年版の版元である西村九郎右衛門から板株は売却されても、版木や明治二十九年版は再利用されなかったことが窺える。

(二) 版元

同所の見返しには、平仮名絵入二冊／

【図39】『孝子善之丞感得伝』上巻(明治29年〈1896〉刊、横山邦治氏蔵)「新日本古典籍総合データベース」より

【図38】『孝子善之丞感得伝』下巻(明治29年〈1896〉刊、横山邦治氏蔵)「新日本古典籍総合データベース」より

奥州善之丞感得伝／
尾陽書肆文光堂蔵

とあり、巻末の奥付に
は、

明治三十六年九月讓

受／発行者愛知県名

古屋市横三ツ蔵町五

丁目梶田勘助

発行所西京三条通寺

町西へ入ル細川清助

／同大阪安土町四丁

目鹿田静七／大阪北

久太郎町四丁目橋本

徳兵衛／同東京浅草

北東仲町吉田久兵衛／同名古屋市末広町十七番戸文光堂書店

とある。

このことから、明治三十六年（一九〇三）に板株を譲り受け、主に愛知県名古屋市にあった文光堂梶田勘助を中心に刊行されたと見て良いだろう。

東京の書店も取り扱っていたようだが、発行所の分布は愛知と大阪の西日本を中心としている。板株が京都を出て、愛知の版元に渡ったのである。

版元の文光堂梶田勘助については、判明していることが多くない。『尾張出版文化史』によると、明和から明治まで活動していたようだが⁹⁹、同一と目される迎歡堂勘助は天保から明治¹⁰⁰、同じく文光堂梶田氏を称する秋田屋源助は嘉永年間から昭和まで続くとしている¹⁰¹。同書による迎歡堂勘助は長島町廣小路に居を構え、秋田屋源助は門前町、鐵炮町、末廣町、横三蔵町に転居したらしく、後者の方の住所は明治三六年版の奥付の記載内容とも合致している。

【図40】『孝子善之丞感得伝』上巻
(明治36年<1903>刊、國學院大學蔵)筆者撮影

『感得伝』関連作品のうち、二作品は愛知県に伝来しており、天明五年版を所蔵する蓮性院もまた愛知県に所在するほか、再版本の版元の所在地や墨書から、愛知県での流布の痕跡が多いことが見て取れた。また、肉筆画の関連作品である「孝子善之丞感得図絵」を所蔵する愛知県豊田市千足町観音院は、二種の『感得伝』版本を有している。うち一方は寺院の創立と管理に携わる鈴木家に伝わるもので、肉筆画の作者である鈴木猪兵衛（貞棟）が寄付した旨が墨書される。もう一方は同院最後の住職を務めた磯谷明全氏による寄進之辞があり、掛軸の原本となったこの版本を探し求めていたこと、昭和四一年に三好町満福寺で法要の際、偶然『感得伝』があることを知り譲り受けたことが記されている¹⁰²。これにより、江戸時代後期から近代において、『感得伝』を通じた同地域の浄土宗寺院間の横の繋がりも皆無ではなかったことが見て取れた。県内浄土宗寺院内では、『感得伝』の知名度が一定程度保たれていたと言えよう。

おわりに

本論では各章の論考を通して、『感得伝』の成立の背景、挿絵の特徴、再版本における展開等、体系的な研究を試みた。

一章では、『感得伝』の概要を述べた後、成立の宗教的背景と文化的背景について整理し、その特徴を考察した。『感得伝』が示す仏教的色彩の強い奇異性は、善之丞が信奉する無能上人の宗教意識や、その周囲の念仏集団の影響を受けていた。また、文化的背景に着目すると、出版文化の隆盛や、絵解き、孝子説話の流行が影響を与えていることが見て取れた。『感得伝』は地獄極楽巡り譚以外にも複数の要素があり、それまでの短編仏教説話のように単純な構成ではなかったからこそ、人々の関心を集め、広く普及したのだと考えられる。

二章では、『冥祥録』と『感得伝』の本文と挿絵を比較し、加えて挿

絵の特徴として、地獄極楽それぞれの表象を整理した。『感得伝』刊行前後は、異界表現のある出版物に人気が出始めた時代であり、その影響により、地獄を描いた挿絵の分量が多くなっているものと推測された。

また、『感得伝』の地獄の特徴は、身近な罪による地獄を示すことで、自らの罪を自覚させようとしている点にあった。更に、大首絵と類似した閻魔王の表象に関しては、前代までの仏書の挿絵には見られない表現方法であり、興味深い点と言える。また、極楽における「当麻曼荼羅」の流用に関しては、図様が普及したことで、「当麻曼荼羅」が極楽の具現化として更に身近なものとなったことに加え、同版元からの挿絵付き解説書の存在も『感得伝』の挿絵に影響を与えたのではないかと考えられる。

第三章では、初版以降の版本の展開について述べた。再版本の多くは初版本を被せ彫りにしたものであることが分かり、また、『感得伝』版本の墨書から、元々愛知県浄土宗寺院に所蔵されていた版本が散見され、加えて最終的に版元も京都から愛知のものへと移行していることが明らかになった。宇佐美諦練氏によると、愛知県には全国で最も多い四八三六寺の公認された宗教法人があり、宗派別に見ると浄土宗系が二二九九寺と最多で、特に真宗大谷派が多いとのことであった¹⁰³。『感得伝』再版本の展開からも、同地方の浄土宗信仰の活発さが示されている。ほか、被せ彫りがされていない明治二九年版の善之丞の服装から、同時期の刷物の形式の資料との関連性が確認出来た。

近世期は、地獄というモチーフが文芸や美術等あらゆる分野において取り上げられた時代である。『感得伝』は、浄土宗捨世派の思想に基づく念仏の称揚や、子から親への孝行の奨励等、近世前中期の文化の流れを引き継ぎつつも、多種多様な地獄を当時最先端の画法で描き出した作例の一つとして提示出来る。地獄の表象に人々の創意や想像が加わるようになったこと自体、当時の異界表現への関心の高さが窺えるが、『感得伝』並びにその関連作品の誕生、普及は、幕末期のバラエティに富ん

だ地獄の表象を生み出す追い風の一つになったと考えられる。

本論では、全国的に知名度があった勸化本『感得伝』の体系的な研究をすることで、近世から近代にかけての地獄観の一端を明らかにすることを試みた。しかし、挿絵の量や内容の面で『感得伝』と比較し得る勸化本を見つけることがかなわなかったため、『感得伝』を含めた同時代の絵入勸化本の横の繋がりが展開を論じきれていない。また、後発の関連作品に関しても、肉筆画に関する論考は紙面の都合上別稿に譲ることとなった。今後は、『感得伝』の比較対象となり得る絵入勸化本を探求しつつ、未発表の肉筆画に関して順次論じると共に、浄土宗が盛んな地域だけでなく、関連する寺院や僧侶の動向を探り、そこから寺院同士の繋がりがや、関連作品の広まりを調査することを、課題としたい。

【註】

- 1 矢島新「近世の地獄絵—素朴な表現の作品を中心に—」（『仏教美術論集第七巻 近世の宗教美術』、十五—三六頁、竹林舎、二〇一五年）十八頁
- 2 堤邦彦「近世仏教説話の研究—唱導と文芸—」（翰林書房、一九九六年）四九—一五〇頁。以下、「堤前掲書」と略称する。
- 3 例外として、近世を通して幾度も刊行された『往生要集』に関する西田直樹氏の一連の論考がある。詳細は、氏の原著『仮名書き絵入り往生要集』の成立と展開—研究篇・資料篇—（和泉書院、二〇〇一年）を参照。
- 4 内村和至「宝洲評注『孝感冥祥録』について」（明治大学文学部文芸研究会『文芸研究』明治大学文学部紀要—一二五号、一一二七頁、二〇一五年）九頁
- 5 伝阿「女人愛執恠異録」序（高田衛、原道生編『叢書江戸文庫』四四巻、西田耕三校訂『仏教説話集成』二巻、国書刊行会、一九九八年）四四八頁
- 6 長友千代治「近世貸本屋の研究」（東京堂出版、一九八二年）「付載 城ノ崎温泉中屋甚左衛門の貸本」二一—六頁。なお、このリストに記載の『感得伝』は、後に国文学者の水谷不倒が購入し、現在は早稲田大学図書館が所蔵していることが、上巻表紙裏の中屋甚左衛門の印記から理解出来る。後述のように早稲田大学図書館本は二種あるが、このうち請求番号「へ一三〇三二七五」が該

7

当てる。(http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/hel3/hel3_03275/index.html) (最終閲覧日: 二〇二〇年十一月二八日)

- 詳細は以下の通り。
- ① 「地獄図屏風」(ライデン国立民族学博物館蔵、六曲一隻、無款、江戸時代中期(十八世紀)か)
 - ② 「地獄極楽図」(千葉県いすみ市円蔵律寺旧蔵、いすみ市郷土資料館寄託、全三幅、無款、江戸時代後期か)
 - ③ 「直往孝感冥祥録絵図」(愛知県岡崎市鴨田町九品院蔵、全二幅、無款、江戸時代後期か) 未見。なお、九品院は無能上人と同じく捨世派のうち、徳本流の中心捨世地である。九品院の浅岡氏によると、軸箱には「直往孝感冥祥録絵図」、添付された内題には「孝子善之丞」とある。
 - ④ 「孝子善之丞幽冥感見之曼荼羅」(福島県伊達郡桑折町万正寺坂町観音寺蔵、全二幅、良喜画、文化元年(一八〇四))
 - ⑤ 「孝子善之丞感得図絵」(愛知県豊田市千足町観音院、全八幅、鈴木猪兵衛画、文政十二年(一八二九))
 - ⑥ 「孝子善之丞感得御絵伝」(長野県須坂市上中町公会堂(旧法然堂)蔵、全四幅、願主問道、天保十二年(一八四一))
 - ⑦ 「孝子善之丞曼荼羅図」(長野県上田市別所温泉常楽寺蔵、全二幅、月嶋画、嘉永元年(一八四八))
 - ⑧ 「孝子善之丞感得図絵」(長野県飯田市上郷黒田光福寺蔵、全二幅、安政七年/万延元年(一八六〇)寄進) 未見。
 - ⑨ 「孝子善之丞画讃」(福島県伊達郡桑折町無能寺蔵、全一幅、江戸時代) 無能寺編『三百会期記念 無能上人と無能寺』(平成三〇年) 所収。
 - ⑩ 「孝感地蔵尊像」(福島県伊達郡桑折町無能寺蔵、厨子入、江戸時代) 前掲無能寺編書所収。
 - ⑪ 「本朝廿四孝」の「信濃国善之丞」(大英博物館蔵、一枚刷、歌川国芳画、天保十四(弘化四年(一八四三)一八四七))
 - ⑫ 「皇国二十四功」の「信濃国の孝子善之丞」(国立国会図書館蔵、一枚刷、柳亭種彦記、月岡芳年画、明治二〇年(一八八七))
 - ⑬ 「孝子善之丞感得伝」(①武蔵野文化協会蔵・江戸東京博物館寄託、②愛知県岡崎市細川町蓮性院蔵、③広島大学図書館蔵、上下二巻、天明五年(一七八五)再版本、版元京都澤田吉左衛門・東都山崎金兵衛)

8

- ⑭ 「孝子善之丞感得伝」(①國學院大學蔵、②ベルリン国立図書館蔵、③弘前市立弘前図書館蔵、上下二巻、刊記不明、版元永田調兵衛)
- ⑮ 「孝子善之丞感得伝」(横山邦治氏蔵、上下二巻、明治二九年(一八九六)版、版元西村九郎衛門)
- ⑯ 「孝子善之丞感得伝」(國學院大學蔵、上下二巻、明治三六年(一九〇三)、版元梶田勘助)

8 『感得伝』の成立に関する詳細は、左記の論考に詳しい。

- ・横山邦治「奇談ものの展開相について」(二) (横山邦治『読本の研究—江戸と上方と—』、風間書房、一九七四年)
- ・後小路薫「近世勸化本の極楽譚—善之丞の地獄極楽巡りの背景—」(『国文学—解釈と鑑賞—』五五巻八号、一九九一年)
- ・堤邦彦「近世仏教説話の研究—唱導と文芸—」(翰林書房、一九九六年)
- ・長谷川匡俊「近世の念仏聖無能と民衆」(吉川弘文館、二〇〇三年)
- ・内村和至「宝洲評注『孝感冥祥録』について」(明治大学文学部文芸研究会『文芸研究—明治大学文学部紀要—』一二五号、一一二七頁、二〇一五年)
- 9 『感得伝』の挿絵をもとに描かれた肉筆画については、下記の先行研究が知られている。
- ・渡浩「『孝子善之丞感得伝』とその絵画—表紙によせて—」(絵解き研究会『絵解き研究』第十六号、二〇〇二年) 註7 関連作品のうち、①「地獄図屏風」(ライデン国立民族学博物館蔵)、②「地獄極楽図」(千葉県いすみ市円蔵律寺旧蔵、いすみ市郷土資料館寄託)、④「孝子善之丞幽冥感見之曼荼羅」(福島県伊達郡桑折町万正寺坂町観音寺蔵)、⑦「孝子善之丞曼荼羅図」(長野県上田市別所温泉常楽寺蔵) の存在について、同論文が初めて指摘した。
- ・織田顕行「近世における「善光寺如来絵伝」の一形態—飯田市・光福寺本の紹介を兼ねて—」(飯田市美術館博物館『飯田市美術館 研究紀要』二五号、一九一—三三頁、二〇一五年)
- ・小林一郎「須坂市法然堂『孝子善之丞感得御絵伝』中の五趣生死輪図について」(長野郷土史研究会『長野』第二八四号、二八一—三三頁、二〇一二年)
- ・小林玲子「須坂市上中町法然堂『孝子善之丞感得御絵伝』絵解き口演までの経緯」(長野郷土史研究会『長野』第二八三号、一九一—三三頁、二〇一二年)
- 等のほか、ブログ「小林玲子の善光寺表参道日記」の「法然堂(須坂市)「孝子善之丞感得御絵伝」を渡教授が調査」(http://blog.livedoor.jp/naganoeto

- kinol/archives/1774058.html) (最終閲覧日：二〇二〇年十一月二九日) 等
 での肉筆画について言及している。また、三井記念美術館、龍谷大学龍谷
 ミュージアム、NHKプロモーション共編『特別展 地獄絵ワンダーランド』
 (NHKプロモーション、二〇一七年) で「孝子善之丞感得図絵」(愛知県豊
 田市千足町観音院蔵) が展示されたこともあり、図録内に記載が見られる。
- 10 早稲田大学図書館古典籍総合データベースでは天明二年刊の『孝子善之丞感得
 伝』が二種あり、本論では目録が詳細な請求番号「へ一三 〇三二〇五」(http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/hel3/hel3_03205/index.html) (最終閲覧日：二〇二〇年十二月十九日) を初版本として本文・図版等で引用する。も
 う一種(請求番号「へ一三 〇三二七五」)は題箋が付属しており、「入孝子善
 之丞感得伝」とある。
- 11 『孝子善之丞感得伝』(國學院大學蔵、上下二巻、明治三六年(一九〇三)、版
 元梶田勘助) に見られる。
- 12 長谷川匡俊『近世の念仏聖無能と民衆』(吉川弘文館、二〇〇三年) 一四七―
 一四八頁。以下、「長谷川前掲書」と略称する。
- 13 北城伸子校訂『孝子善之丞感得伝』(堤邦彦・杉本好伸編『近世民間異聞怪談
 集成』九九一―一〇五二頁、国書刊行会、二〇〇三年) 一〇五三―一〇五六頁。
 前掲『感得伝』、一〇五四―一〇五五頁。例として、『感得伝』の本文の元となっ
 た『冥祥録』(享保十九年(一七三四)のほか、無能編『近代奥羽念仏験記』(享
 保五年(一七二〇)、宝洲撰『無能和尚行業記』(享保六年(一七二一)、不能・
 厭求編『無能和尚行業記遺事』(安永七年(一七七八))等がある。
- 14 前掲『感得伝』、一〇五四―一〇五五頁。例として、『感得伝』の本文の元となっ
 た『冥祥録』(享保十九年(一七三四)のほか、無能編『近代奥羽念仏験記』(享
 保五年(一七二〇)、宝洲撰『無能和尚行業記』(享保六年(一七二一)、不能・
 厭求編『無能和尚行業記遺事』(安永七年(一七七八))等がある。
- 15 前掲『女人愛執怪異録』序、四四八頁。
- 16 新纂浄土宗大辞典より「宝洲」(<http://jodoshuzensho.jp/dajiten/index.php/%E5%AE%9D%E6%B4%B2>) (最終閲覧日：二〇二〇年二月十五日)
- 17 前掲『感得伝』、一〇五一頁。
- 18 『感得伝』の成立に関する先行研究の概要を纏める。横山邦治氏は「奇談ものの
 展開相について(二)」「横山邦治「読本の研究―江戸と上方と―」、風間書房、
 一九七四年)において、国内で翻案された奇談ものの作品の多くが仏教的色彩を
 強く見せていることを指摘した。その際、同時期の作品で同じく仏教的色彩を
 持つ勸化ものの中で、『冥祥録』や『感得伝』に言及した。また、『冥祥録』は談
 義僧の手を経て出来上がったものであり、直往自身も自分の霊験を説いて廻る
 談義僧の一人であると考察した。加えて、『冥祥録』が勸化ものに付き物の談義
- 僧の手控えといった性格を有していること、その内容には①仏教的色彩の強い
 奇異性、②長編小説への志向、③実話実録性をもっており、共通性があったとした。
 次いで後小路薫氏は、「近世勸化本の極楽譚―善之丞の地獄極楽巡りの背
 景―」(『国文学―解釈と鑑賞―』五五巻八号、一九九一―三〇四頁、至文堂、
 一九九〇年)で、『験記』にある善之丞の父・善四郎による霊験報告との相違
 点を指摘し、また校訂に関わった伝阿の『女人愛執怪異録』の跋文にある『冥
 祥録』の前段階にあたる小冊子が、大谷大学図書館蔵『直応法師浄土地獄感見記』
 であると比定した。加えて、『冥祥録』や『感得伝』で語られる極楽の様相と『行
 業記』で無能が臨終近くに見た極楽の表現の一致から、善之丞の地獄極楽巡り
 譚は厭求を中心とした無能の念仏集団の中で成長した可能性を示唆した。
- 内村和至氏は、「宝洲評注『孝感冥祥録』について」(明治大学文学部文芸研
 究会『文芸研究―明治大学文学部紀要―』一二五号、一一二七頁、二〇一五年)
 で、『冥祥録』の成立過程や評注を付記した宝洲の性格について研究した。更に、
 評注の内容が極めて豊富な経典知識から物語を裏付けしたものである故に、善
 之丞の体験の特異性よりも経典の具体例として矮小化する傾向と、宝洲自身の
 信仰心から発される匂いのようなものを人々は嗅ぎとり、宝洲の評注は外され
 たのではないかと考察している。
- 19 長谷川前掲書にて無能上人の思想と民衆の様相について体系的に論じられている。
 横山邦治前掲論文、一五九―一六一頁。
- 20 長谷川前掲書、六一―九頁。
- 21 『無能和尚行業記』上巻(桑折町史編纂委員会編『桑折町史第四巻資料編Ⅰ』考
 古資料・文化史料』、五七一―五九〇頁、桑折町史出版委員会、一九九八年)
 五七三―五七六頁。
- 22 長谷川前掲書、六八―六九頁、表三「無能の巡教」より。
- 23 長谷川前掲書、一〇三―一〇四頁。全文は以下の通り。
- 24 「南半田村田町 善四郎口上書
 私儀、一昨年十月の頃より癩病を相煩い、形相醜陋に罷り成り候故、種々療治
 を加え候ら得共、その験もなく追日重く罷り成り、首髪眉毛まで随落仕り、人
 の交わりもなりがたく、妻子等までいたく迷惑仕候処に、去年霜月七日、桑折
 大安寺にて尊師御勸化の節、拙者密かに参詣仕り、所作百遍受け奉り、相勤め
 申し候処に、当正月六日の夜、夢に尊師御来臨、「その方、病氣不便の事なり、

- 日課至誠に勤め候らえば、その病本復すべし」とと御告げを蒙り夢覚め申し候。その後一心に相勤め候らえば、又、翌夕の夢に導師、「所作の勤め様よろしからず、仏に向い座してつとむべし。教えの如く勤めば三昧発得の人と来すべし」と仰せられ、と思ひ夢覚め申し候。有難く存じ奉り、それ以後は一万遍以上、毎日仏像に向い相勤め申し候らえば、一両月の内に右の悪病本復仕り、頭髮眉も、いにしへの如くに生え出で申し候。ここに因つて酒肉を相止め、所作二万遍に加増仕り候、已上。当七月十四日の晩、持仏堂に向い御念仏申し罷り居り候所に、子息善之丞受け奉り候御名号より、光明を現じ、その前に御長八、九寸程の金色の仏躰、御立ち遊ばされ候を、父子一同拝し奉り候。以上
申十月十九日
- 26 長谷川前掲書、善四郎口上書一〇三—一〇四頁、長谷川氏指摘一二二—一二三頁。後小路薫氏は、後小路前掲論文で『験記』にある善之丞の父・善四郎による霊験報告との相違点を指摘し、『冥祥録』や『感得伝』で語られる極楽の様相と『行業記』で無能が臨終近くに見た極楽の表現の一致から、善之丞の地獄極楽巡り譚は厭求を中心とした無能の念仏集団の中で成長した可能性を示唆している。くずし字研究会編『影印翻刻『孝感冥祥録』』上巻(佛科大学くずし字研究会、二〇〇六年)、一六—一七頁。
- 25 内村前掲論文、一三四頁。
- 24 堤前掲書、一二四頁。
- 23 長谷川匡俊『近世浄土宗の信仰と教化』(溪水社、一九八八年)二五一頁。
- 30 前掲『感得伝』、九九四—九九五頁。
- 31 前掲『感得伝』、九九六—九九七頁。
- 32 内村前掲論文、一三三頁。
- 33 長谷川前掲書(註12)、一一〇頁。
- 34 前掲『感得伝』、一〇三—一〇四頁。
- 35 堤邦彦前掲書、七〇頁。
- 36 長谷川前掲書(註12)、九一—九五頁。なお同書によると、『奇特集』において地蔵を感じたという事例は一四一件三三三—三三三パーセントに及ぶという。
- 37 後小路前掲論文、一三三—一三四頁。
- 38 前掲『行業記』上巻、五八九頁。
- 39 前掲『行業記』上巻、同頁。
- 40 渡邊昭五「絵解きと地獄絵(一)―その歴史―」(一冊の講座編集部編「一冊の講座」『絵解き』、九八—一〇六頁、有精堂出版、一九八五年)九八頁。
- 41 小栗栖健治「図説地獄絵の世界」(河出書房新社、二〇一三年)六四頁。
- 42 前掲『冥祥録』上巻、一二五—一二七頁。
- 43 後小路薫『勸化本の研究』(和泉書院、二〇一〇年)六〇—六三頁。
- 44 後小路前掲書、三三九頁。
- 45 岩城紀子「浄土双六考」(『東京都江戸東京博物館研究報告』第一号、一五七—一九四頁、東京都歴史文化財団、一九九五年)一六〇—一六一頁。
- 46 岩城前掲論文、一六一—一六三頁。
- 47 堤前掲書、六五頁。
- 48 徳田進「孝子説話集の研究近世篇―二十四孝を中心に―」(井上書房、一九六三年)
- 49 勝又基『親孝行の江戸文化』(笠間書院、二〇一七年)、二〇三頁。
- 50 勝又前掲書、二〇二—二〇三頁。
- 51 くずし字研究会編『影印翻刻『孝感冥祥録』』下巻(佛科大学くずし字研究会、二〇〇七年)八四—八五頁。
- 52 前掲『冥祥録』下巻、八六—八七頁。
- 53 前掲『冥祥録』下巻、九〇—九一頁。
- 54 前掲『冥祥録』下巻、九〇—九一頁。
- 55 前掲『冥祥録』下巻、九〇—九一頁。
- 56 前掲『冥祥録』下巻、六八—六九頁。
- 57 前掲『冥祥録』上巻、四九—五一頁。
- 58 矢島前掲論文、三二頁。
- 59 横山重、太田武夫校訂『室町時代物語集』第二巻(大岡山書店、一九三八年)五三—五六頁。
- 60 江本裕氏は「近世小説と挿絵」(一冊の講座)『絵解き』、二七五—二八九頁、有精堂、一九八五年)二八〇頁にて版本の挿絵に見られる閻魔王像の典拠を六道絵や十界図に求めている。
- 61 西田前掲書、三四頁。
- 62 前掲『感得伝』、一〇三—一〇四頁。
- 63 前掲『感得伝』、一〇四—一〇五頁。
- 64 宮腰直人「孝子善之丞感得伝」の世界―仏教説話とフィクションの問題をめぐって―(日本フランス語フランス文学会東北支部会『Notes—日本フランス語フランス文学会東北支部会会報』第十号、一三—二八頁、二〇一七年)

- 二五頁
- 65 日沖敦子『当麻曼荼羅と中将姫』（勉誠出版、二〇二二年）、口絵「構成図」より
内村前掲論文のほか、内村和至「メディアの中の人間像―大和清九郎伝の成立―」（明治大学文学部文学科文芸専攻／文芸メディア専攻「文芸と言語メディア―その過去と未来―」、一四九―一六六頁、蒼丘書林、二〇〇五年）一六〇頁
- 67 新日本古典籍総合データベースより横山邦治氏蔵『孝子善之丞感得傳』（<https://kotensekiniji.ac.jp/biblio/100252499/viewer>）（最終閲覧日：二〇二〇年十二月十九日）本論では、明治二九年版は全て横山邦治氏蔵本を参考にした。
- 68 ヘルリン国立図書館『孝子善之丞感得伝』（https://digitalstaatsbibliothek-berlin.de/werkansicht?PPN=PPN3308100126&PHYSID=PHYS_0001&DMID=）（最終閲覧日：二〇二〇年十二月二〇日）
- 69 古典籍総合データベース「繪入／孝子善之丞感得傳」（<https://kotensekiniji.ac.jp/biblio/100179617/viewer/>）（最終閲覧日：二〇二〇年十二月二〇日）
- 70 後小路前掲論文、一三四頁。
- 71 富山大学学術情報リポジトリ「富山大学附属図書館所蔵ヘルン（小泉八雲）（ラファディオ・ハーン）文庫目録：改訂版（稿）」（https://toyamareponi.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=7517&item_no=1&page_id=32&block_id=36）「書名・文献名目録（TITLE INDEX）」（file:///C:/Users/edomiorh/Downloads/CatLH_Rev_04_Titleindex_ver2.pdf）（最終閲覧日：二〇二〇年十一月二二日）三二頁より。
- 72 新日本古典籍総合データベース『孝子善之丞感得伝』（富山大学図書館ヘルン文庫蔵）（<https://kotensekiniji.ac.jp/biblio/100093338/viewer/104>）（最終閲覧日：二〇二〇年十一月二二日）
- 73 富山大学学術情報リポジトリ「Catalogue of the Lafcadio Hearn Library in the Toyama High School」一一七頁より。（https://toyamareponi.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=7521&item_no=1&page_id=32&block_id=36）（最終閲覧日：二〇二〇年十一月二二日）
- 目録には享保八年跋、澤田吉左衛門版としており、明和二年を刊記とする本は、目録上段の別本となっている。転載するにあたり誤植があった可能性が高い。
- 74 早稲田大学図書館古典籍総合データベース『孝子善之丞感得伝』（天明二年〈一七八二〉跋、澤田吉左衛門版、請求記号：ハ二三 〇三二七五）（https://www.wvl.waseda.ac.jp/kotenseki/html/hel3/hel3_03275/index.html）（最終閲覧日：二〇二〇年十一月二二日）との比較による。
- 75 新編岡崎市史編集委員会編『新編岡崎市史―総集編―』第二〇巻（新編岡崎市史編さん委員会、一九九三年）四一八頁。
- 76 前掲『新編岡崎市史―総集編―』、六九七頁。
- 77 久保田啓一、正本綾子「広島大学蔵近世文学書目録稿（二）―前期読本―」（広島近世文学研究会編『鯉城往来』第二号、一六一―一七七頁、一九九九年）一六七頁
- 78 久保田啓一、正本綾子「広島大学蔵近世文学書目録稿（一）―仮名草子・浮世草子―」（広島近世文学研究会編『鯉城往来』創刊号、一三三―一四三頁、一九九八年）一三三頁
- 79 国立国会図書館サーチ「繪詞要略誓願寺縁起」二卷上、下（<https://crinii.ac.jp/ncid/BB1757145X>）（最終閲覧日：二〇二〇年十一月二二日）並びに国立国会図書館サーチ「賢問子行状記」1（<https://iss.ndl.go.jp/books/R100000001-1017907664-00>）（最終閲覧日：二〇二〇年十一月二二日）より。なお、『繪詞要略誓願寺縁起』は東京大学総合図書館、『賢問子行状記』は石川県立図書館に所蔵されている。
- 80 後述の関連や敬首等を除いた残りの僧侶に関しては、萬蓮社順誉上人が二本松台運寺住職（札幌大学学術情報リポジトリより高嶋弘志「近世蝦夷地の仏教と寺院―有珠善光寺の住職交代について―」（札幌大学『地域と経済』二号、四一―五五頁、二〇〇五年）四六頁）（https://sapporo-u.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=327&item_no=1&page_id=13&block_id=17）（最終閲覧日：二〇二〇年十一月二八日）の可能性があるほか、雲蓮社沾誉上人、喚蓮社遺誉上人、圓成海音大和上、超蓮社性誉上人、淨蓮社香誉上人、仰蓮社喚誉上人らは不明である。なお、仮に萬蓮社順誉上人が二本松台運寺住職であった場合、二本松台運寺は桑折町観音寺所蔵の『感得伝』を描いた絵解き用肉筆画「孝子善之丞幽冥感見之曼荼羅」の作者良喜上人と同じ寺院の人となり、浄土宗寺院並びに僧侶の繋がりが示される。
- 81 無量山傳通院のホームページ「寺歴沿革」の「開山了誉上人」から「歴代住職」より（<http://www.denzuinor.jp/all/rekidai.htm>）（最終閲覧日：二〇二〇年

- 十一月二八日) (https://kotobank.jp/word/%E9%96%A2%E9%80%A-1068512) (最終閲覧日: 二〇二〇年十一月二八日)
- 82 コトバンク「関通」より (https://kotobank.jp/word/%E9%96%A2%E9%80%A-1068512) (最終閲覧日: 二〇二〇年十一月二八日)
- 83 WEB版新纂浄土宗大辞典「敬首」より (http://jodoshuzensho.jp/dajiten/index.php/%E6%95%AC%E9%A6%96) (最終閲覧日: 二〇二〇年十一月二八日)
- 84 藤澤紫『鈴木春信絵本全集—研究編—』(勉誠出版、二〇〇〇年) 四七九—四八〇頁。
- 85 藤澤前掲書、四九〇—四九二頁。
- 86 藤澤前掲書、五一九—五二二頁。
- 87 蓮性院本は常時非公開。本論で使用した同本の画像は、愛知県今濟寺(住職大島隆獅氏)が持ちである同本をモノクロでスキャンし印刷された画像を、蓮性院から許可をいただいた上で筆者が撮影し使用した。原資料そのものを撮影した画像ではないため、現地での調査が目下の課題となる。
- 88 Cinii Booksより図書・雑誌「澤田吉左衛門」での検索結果による。(https://cinii.ac.jp/ncid/BN12707139) (最終閲覧日: 二〇二〇年十一月二二日)
- 89 早稲田大学図書館古典籍総合データベース『三国七高僧伝図会』(万延元年、西村九郎右衛門版、請求記号: 文庫三〇 E〇一九〇) (https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/bunko30/bunko30_e0190/index.html) (最終閲覧日: 二〇二〇年十一月二二日)
- 90 新日本古典籍総合データベース『三国七高僧伝図会』(万延元年、永田調兵衛版、酒田市立光丘文庫蔵) (https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100225507/viewer/269) (最終閲覧日: 二〇二〇年十一月二二日)
- 91 早稲田大学図書館古典籍総合データベース『三国七高僧伝図会』(万延元年、西村九郎右衛門ほか、請求記号: 文庫三〇六〇五) より (http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/he13/he13_00605/index.html) (最終閲覧日: 二〇二〇年十一月二二日)
- 92 以下に提示した福井敏隆氏の証言は、筆者が弘前市立弘前図書館へ問い合わせたご回答に基づく。
- 93 武田功、神田健策、早坂基ら共著「南部一騎軍書」と風聞・芸能の民衆世界」(弘前大学農学生命科学部『弘前大学農学生命科学部学術報告』第六号、八二—九八頁、二〇〇三年) 八二頁 (https://hrosakireponiia.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=4427&item_no=1&page_id=13&block_id=21) (最終閲覧日: 二〇二〇年一月三日)
- 94 井上隆明『改訂増補近世書林版元総覧』(「日本書誌学体系」七六、青裳堂書店、一九九八年) 四六六頁
- 95 国立国会図書館デジタルコレクション「通俗瓦礫集—真宗説教二編—」(明治十二年(一八七九)) より (http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/822194) (最終閲覧日: 二〇二〇年十一月二二日)
- 96 国立国会図書館デジタルコレクション「安心評義弁」(明治二年(一八八九)) より (http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/819894) (最終閲覧日: 二〇二〇年十一月二二日)
- 97 国立国会図書館デジタルコレクション「秦鏡録」(明治二〇年(一八八七)) より (http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/821440) (最終閲覧日: 二〇二〇年十一月二二日)
- 98 初版と明治二九年版を比較すると、下巻挿絵④蓮心が善之丞の自殺を止める場面では、初版は下巻二六丁後半であるのに対し、明治二九年版は二七丁前半になっており、半丁ズレが生じている。そのため初版の挿絵④が明治二九年版では見開き頁内に収まるといって写し崩れが生じている。なお、明治二九年版の無能上人の伊呂波和讃は、本文終了後半丁あけ、天明版同様見開き頁の左側から始まっている。
- 99 拙稿「資料紹介: 『孝子善之丞感得伝』と浮世絵—「本朝二十四孝」の「信濃国善之丞」と「皇国二十四孝」の「信濃国孝子善之丞」—」(藤澤紫ほか『浮世絵にみる文明開化—子ども文化の変遷と教育ツールとしての玩具絵—』平成三〇年度(令和二年度)科学研究費助成事業基盤研究(C) 中間報告書(平成三〇年四月(令和二年二月))一〇五—一二頁)
- 100 太田正弘『尾張出版文化史』(六甲出版、一九九五年) 一五六頁。
- 101 太田前掲書、一五七頁。
- 102 太田前掲書、一五四頁。
- 103 寺院を管理する鈴木久枝氏、鈴木辰雄氏によると、絵師の鈴木猪兵衛が寄付した「感得伝」は、一旦観音院で所蔵していたようだが、いつごろか定かではないうが子孫の鈴木久枝氏宅に戻され、筆者が調査に向かった二〇一八年まで同家の蔵で保管されていたという。そのため、磯谷明全氏が「感得伝」を求めている時期には同院にはなかったと推測される。
- 104 宇佐美諦練「愛知県下に於ける仏教と地域福祉」(佛敎大学社会事業研究所『佛敎福祉』十二号、二二—二九頁、一九八六年) 二二頁